

おとし見

和田天華作
八幡白帆畫

大阪

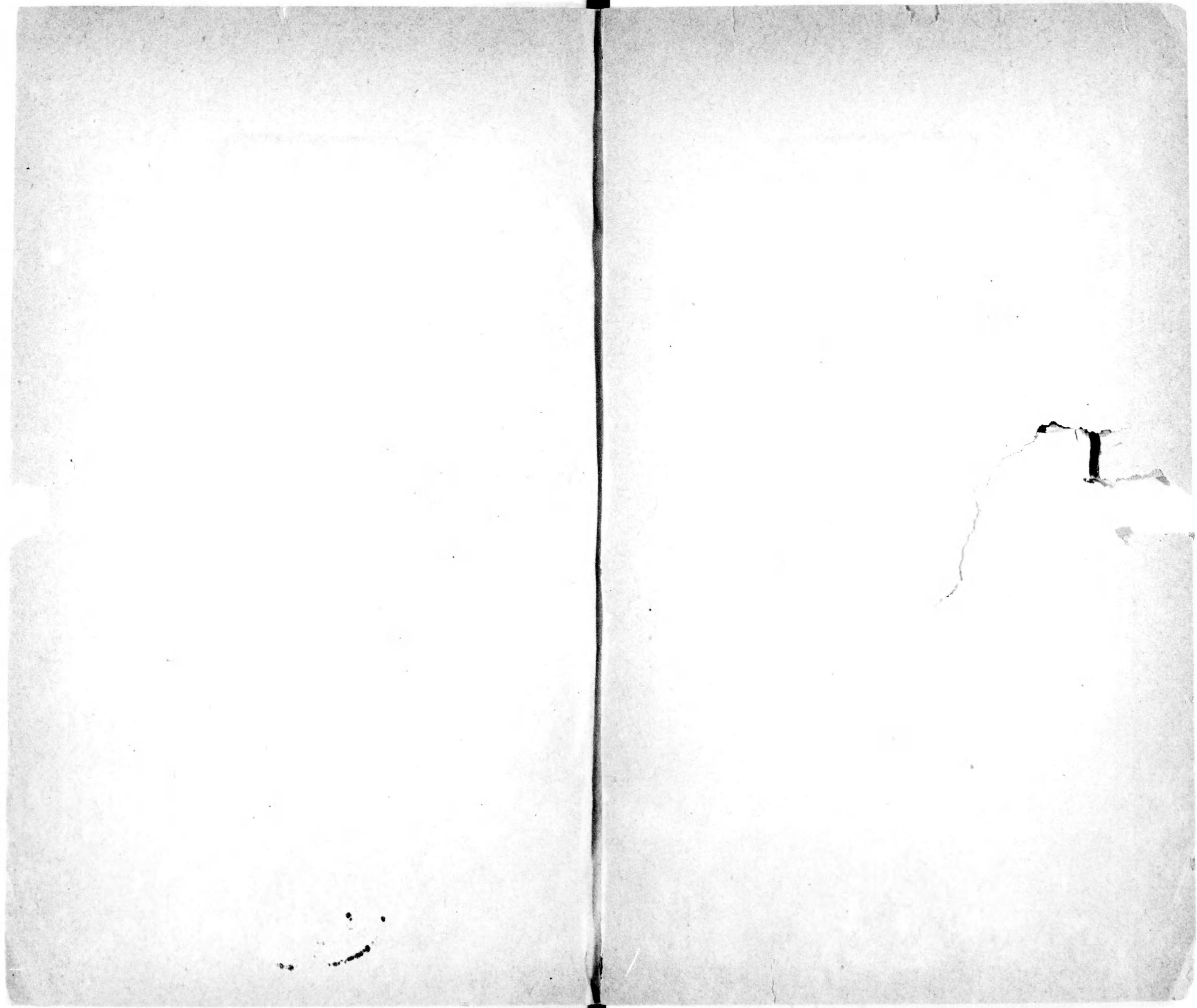
樋口隆文館發行



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





特105
208



兒^ご

八和
幡田
白天
帆華
書作

大正
4. 6. 12
内交





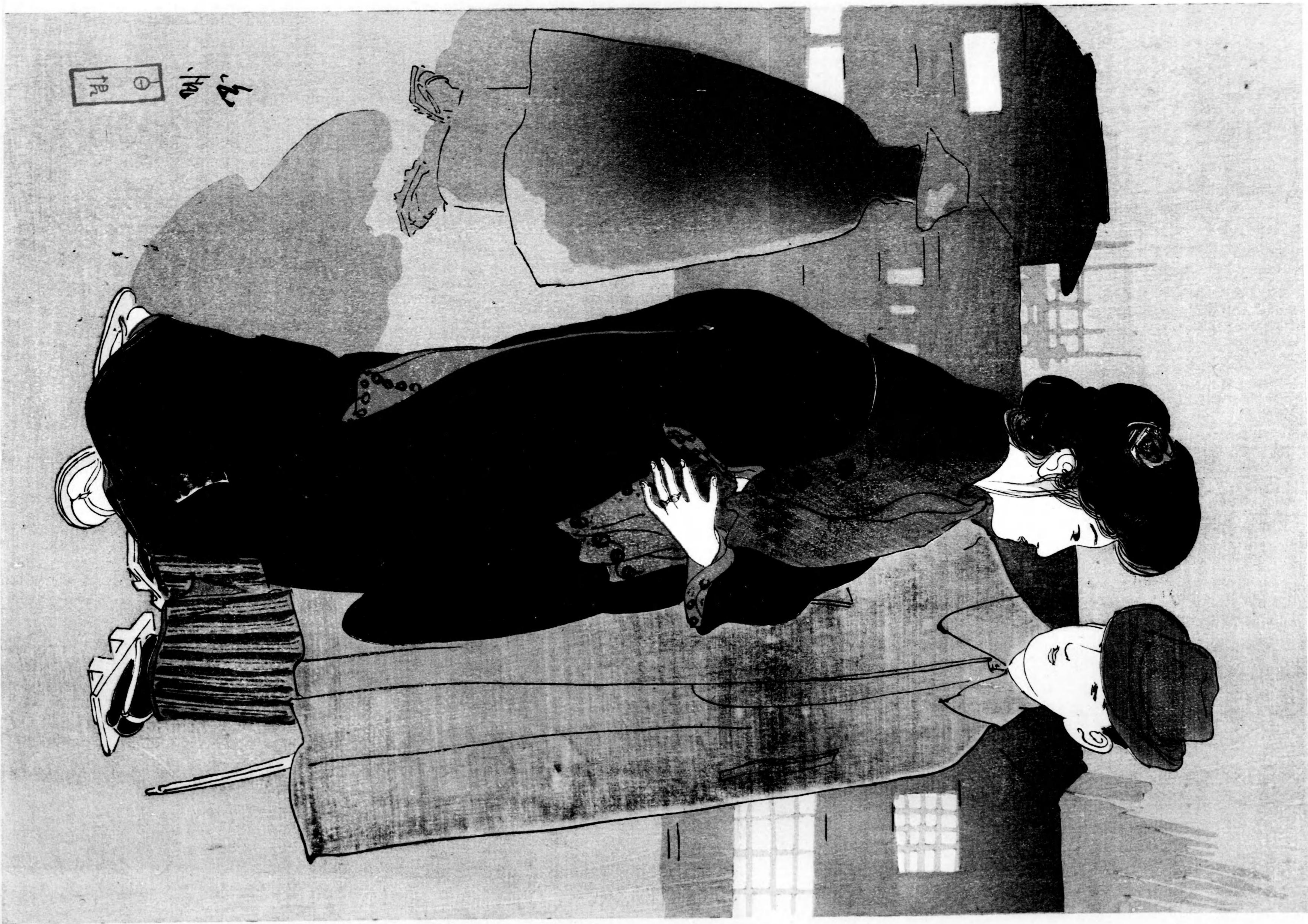
■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	同	同	和	同	同	伊	嶋	同	同	同	羽	同	同	同	同	同	渡
				田			藤	村				様						邊
				天			銀	抱				荷						默
				華			月	月				香						碑
				作			作	脚				作						作

戀浪二弱静予怒出其武命電男風七封女怪千
 のま人き の士 流首 人獅の枝
 意くの 菩藝
 地ら女人子 濤潮女系 薩妓窟子怪子

の大多てに上紙開新の地各西東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もてん體なれど付に物るたし博を評好







おとし兒

和田天華

(一) 阿蘇の噴煙 (一)

肥後の阿蘇山といへば、標高五千五百餘尺、高山といふよりは、日本第一の活火山として名が高い、熊本人の精神修養が此山に負ふ所、頗る大なるは曰ふを俟たぬ。

銀杏城下から西麓戸下までが坦道八里夫れからは登山口で、頂上の中嶽まで三里ある、都の人士など斯う聞いただけで戦慄してしたが、道に土着の肥後人は異つた

見しお

ものである、朝な夕なにその壯烈な噴煙を望んで、豪快な此山を讚美し、此山を憧憬れる事一通りでない、従つて登山なぞ物の數とも思はぬ、花恥しい妙齡の女學生でさへ、結び附けの草鞋で、ドン／＼踏破して、宇宙の神秘に直接觸れて来る。

八月の炎天、氣候は九十何度、モウ十日の餘も照り込んだ暑さ、學生らしい二人連の青年が、緋の浴衣の尻をからげて、太い自然木の洋杖を力に、それでも喘ぎ喘ぎ登つて来る、東京帝國大學の生徒であることは、戴いてゐるその帽子と徽章で判つた、草鞋でも穿いてゐるかと思れば、さはなくて、素足に駒下駄といふ打扮である。

先に立つた方は、眉目清秀の二十四五、後につゞくのは、之も顔質の凛々しい同じ年頃であつた、先の方は池田正也、後の方は緒方時男、共に熊本の健兒で、東京に遊學してゐるのが暑中休暇で歸省したらしい。

『オイ緒方！、什麼した、意氣地がないぞ、モウ千里ヶ原だ、所謂阿蘇の五峯は我

々の眼前に展開されて来たぢやあないか確乎しろ、何んだ這んな山で、見つともない屁ツビリ腰なぞするな。』

見た所は寧弱々しい、白面の貴公子然たる池田の方が、頗る元氣の可い聲で、切つ立てたやうな谷間を登り惱む、緒方を叱咤するのであつた。

緒方も利かぬ氣、却々叱咤されて辟易するやうな男ではない。

『威張るな、下駄が露に滑つて思ふやうに登れないんだ。』

『アハ、、貴様も負けしみが可なりに強いなア。』

笑ひさぞめいて、二人は詞こそ荒いが、温かい友情を見せつゝ、千里ヶ原を一直線に縫つて、轟然に噴火口を目がけて登り、且つ進んで行く。

登る時には焦げつくほどの暑さで、天には一點の雲翳もなかつたが、高山氣象の兎角に變化し易く、湯の谷あたりから、ドン／＼しかけた天氣が、曇つて見たり照つて見たり、少しも定まらない。

と、見る間に、今まで輪廓の鮮かであつた右手の烏帽子嶽の頂きが、ポツとぼかされて、次第に霧に隠されて行く、左手の杵島嶽には緑が深く、露で一入その色が増した、一面濃霧の中に中嶽のみが阿蘇の第一峯高嶽を背負つて、遠電の如な響と共に烈々たる噴煙を擧げてゐる。

颯と捲き起つた疾風と共に、濃霧が低く匍つて宛然奔馬の如き勢ひで二人の面を掠めて行つた。

『オイ、緒方、酷い霧だな、モウ一息だ、山上神社が其處に見れてゐるよ、ヤアヤア困つたな、驟雨が来さうだぞ、急げ、少し急げよ』

池田は緒方を促して、駈足で登つて行く掻き曇つた空が、ポツリ〜と豆のやうな大粒を降したと見る間に、忽ちザーッと車軸を流すやうに殺到して来た。

(二) 阿蘇の噴煙 (二)

四顧暗澹として四邊は晦冥である、雲霧を突き破つて轟々たる物凄い響と共に噴煙は火柱の如く一指天に冲る、何しろ盆を覆すやうな大雨とて、頂上から逆落しに流れて来る泥水は、滔々として宛然湖の如く、山上に近くなつて来たので、硫氣は甚だしく異臭を放つて鼻を衝いて来る、池田も緒方も全く濡鼠となり、帽子を傾けて、下駄を片手に提げつゝ、必死の勇を鼓して驀進し、ヤツと山上神社の傍にある掛小屋の茶店まで来て、突如其處に飛び込んだ。

登山者も二組や三組はあつたやうだが皆慌て、下山したらしい、二人は茶店に飛び込むなり、赤裸になつて、雨に濡れた沿衣を絞つたり、体を拭いたしてゐる。

茶店には五十七八とも見ゆる顔丈らしい老爺がたゞ一人ゐるばかり、二人が駈け

込んで来たのを見ると、悠々と茶盆に澁茶を載せて其處に出て来た。

『合憎の夕立で困つただらうナアニモウすぐ晴るだ、少々ばかり休んでゐらッしわい、血氣盛りの書生さんだな、ウム、濡れて寒いか、此の山は照つたら暑いが、降つたら寒いよ、アッハッハッハ、何にも着るものがないナア、合憎娘が今朝麓へ仕入れに行つたで、俺にやア判らねわんだ、オ一茲に毛布があるよ、まア二人で之でも引ッかけてゐさしわい、ナアニモウ晴るからな。』

老爺は朴訥な飾らない態度で、それでも親切に世話をしてくれる、二人は老爺が貸してくれた毛布にくるまり、茶店の片隅に小さくなつて居ると、雨は忽ち機械でも停止したやうにバツタリ歇んで、今まで掻き曇つてゐた天が瞬く中に開いて、ケロリとしたやうな晴天になつた、その雲足の早さと曰つたら、兎ても麓では想像にも及ばない。

一たび晴れて照つたとなると、又今までは正反對に、グリ／＼と照り附けて暑

いこと此上もない、全く寒暑一時であるその上に噴火口から湧き出する硫氣が、山の大氣に籠もつて、何んとも曰へぬ嫌な氣持がする、二人は元來火口の探検が目的である、けれども裸體では什麼することも出来ないで、兎に角浴衣を乾かしてからにしよう、まだ茶店に休息してゐるのであつた。

其處へ此麓坊中かの方から、大きな籠を小さな軀に背負つて、一向濡れたやうな氣色もなく威勢よく登つて此茶店に這入つた少女がある、年はまだヤツと十五か十六、柄は大きい、何んともなくあざけない様子、田舎娘であつた、日に焼けて色こそ黒けれ、二重瞼の鼻筋の通つた、下膨れの双頬には、絶えず笑室を漂はしてゐる可愛しい姿である、雞に育つて日蔭に埋もれてゐるから、其美はしさが隠れてゐるもの、都に出して磨かば光の出づべき名玉である。

新しい手拭を野暮な庇髪の上に姉さん冠りにして、紺緋の單衣の裾を羽織つた下には紅木綿の腰巻が流れて、脚には脚絆草鞋キリ、ツと結び、手には紺の手甲をか

けてゐる。

此娘こそ今茶店の老爺が噂をしてゐた少女で、今朝早くから山麓の坊中町へ仕入物に行つた歸りである、父一人娘一人、園に植て培へば、美しい花を咲かせる番の身を、何んの因縁でか、阿蘇の山に隠れて、夏期の間は、麓から登山して茶店を出してゐる、名高い阿蘇の孝女お冬といふ娘であつた。
お冬は茶店の老爺さんの一人娘と云はれてゐるが、實は生みの娘ではない、老爺とお冬の身の上には、奇しき因縁が絡はつてゐる。

(三) 阿蘇の憤煙

『老爺さん今歸りました、酷い驟雨でしたね。』

お冬は背中から重い籠を下して、其中から、いろ／＼の菓子などを取り出して並べ

べるのであつた、然もその詞は老爺の素材なのに比して、案外上品で都ぶつた處が少い。

老爺はいそ／＼して、それを出迎へながら、お冬の姿を兎み斯う見して。

『オ、お冬よ、汝少々も濡れてゐないの、何處かで雨宿りでもしてゐたかの、今し方、お登りの書生さんがな、二人連で此雨にぶつかつてよ、われい目に逢つたんだ、衣胸も何もビシヨ濡れた。』

『まア然うでございますか……。』

と、お冬は一寸目を二人の上に移したが、池田と緒方とが、裸体で途方に暮れてゐるのを見て、籠を其處に置いたまゝ、氣軽く走り寄り。

『まア貴下、雨にお逢ひなすたんですか眞箇にお氣の毒ですわね、妾も今坊中の方から登つて來たんですが、丁度降り出す前から、中繼の小母さん、中腹の茶屋の處で話をしてゐましたので、可い塩梅に脱れましたのよ、西麓には中繼がありません』

んからね、驟雨に逢つたら、モウ眞箇に什麼することも出来ませんわ、まアそんなことをして衣服を乾したって干きやアしませんよ、妾がザツと流して上げます。』
 お冬は其處にあつた濡れ浴衣を、小屋の裏手まで持つて行つて、山麓から擔ひ上げた大切な水で、サツと清き出して、適當な位置に乾かし、すぐ亦戻つて来て、草鞋を解くなり、店の古葛籠から、老父の古びた單衣を二枚取り出して、二人の前に置き。

『汚なくッてお心地が悪いでせうが、今清いで干しましたから乾く間、之を着てゐらッしやい、お山を廻つて見てゐる中には乾きませうよ。』

齡には老た、よく行き届いた親切を二人は世にも嬉しく思つて。

『姉さん、眞箇に濟まないア。』

『お蔭で助かるよ、ちやアこれを借りるせ……。』

二人は早速父爺の單衣を引ッかけたが、かうしてゐても仕方がないので。

『オイ緒方、愚圖々々してゐると、噴火口を見られなくなるから、一寸之を借りて中嶽まで行つて來やうか。』

『然うだな、然うしやう、姉さん、ちやア濟まないが、一廻り廻つて來よ。』

二人は跳のま、唇を引ッからげて、茶店を飛び出し、阿蘇山上神社の横手から、硫氣を衝きつ、中嶽に進んで行つた。

お冬は二人が出て行くのを見送つて、ヤツと手甲も外し、脚絆も取つて、足を洗つた、モウ午後二時を過ぎてゐた。

『お冬、腹が減つたらう、早く午飯を喫べなよ、歸り早々、氣の毒だつたのう。』

老翁さんは、見かけは頑丈なものにも似ず、優しい詞で、頻にお冬をいたはつてやる、お冬は素直に、膳を出して食事を初めた、そして、低く垂た雲を見上げながら。

老父さん、またお天氣が變るよ、まだ降りますわねね、アノ書生さん達も、今日

は事によつたら下山られないかも知れないわ、まア泊めて上る積ですわね。」
かう言つてまた箸を運んだ。

(四) 阿蘇の噴煙 (四)

池田と緒方とは、お冬に貸して貰つた單衣の臂を端折つて、山下神社の裏手から
熔岩、焼石の散亂した焼砂原を進んで漸く新火口の畔に立つた。
此新火口は、明治三十九年の六月八日に、突然噴出したもので、中嶽の南腹から
斜に突出してゐる、孔の廣さは十間位だが、噴火が新しいだけ震動の響き、噴火の
勢ひ、頗る凄じいものだ、孔は長方形で漏斗のやうな形をしてゐる、上の方が廣が
つてゐるので、中は宛然焼け爛れた砂礫の湖で硫黄の玉が熱火の如く湧き返り、そ
れが硫氣となつて、渦を巻きながら天空に迸つて行く、驚々たる物凄い響は、大河

の堤を決するが如く、大瀑布が巨石の上に落ちて激するが如く、さては數百の蒸氣
々鐘を一時に運轉するが如く、凄じいなんどいふばかりもない光景である。
二人は次第に火口に近寄つて、たゞ其壯觀に視とれてゐるのであつたが、緒方は
突然足許に熱さを感じて、熔岩の間に交る霧の上を力任せに踏むと、ズル／＼と滑
つて、打見た處堅さうな地皮が案外柔かく、その下から、解けた硫黄の臭氣がブン
と鼻を衝く。
『オイ／＼池田、此下はみんな硫黄だぞ、而して一面に熱いぞ、此邊も火が廻つて
ゐるのかなア。』
と、緒方は兩手を其處に當て見る、池田はそれに耳も傾けず、たゞ熱心に凄じい
勢ひで突出する火口を、瞬きもせず眺めてゐるのであつた。
『オイ、酷く噴火に感心してゐるな、之が地球の地心熱だよ、つまり吾人々類の脚
下の秘密だよ、我々は這んな危い、地面の上に立つてゐるんだ。』

緒方はかう曰つて火口の傍の大きな焼け石の上に腰を下しながら、袂から巻き煙草を出して燻らし初める、池田もヤツと我に歸つたのか、其側に腰をかけて、腕を扼しつゝ、緒方に向つて。

「實に壯觀だ、崇美の極致だな、天下恐らく、これほどの豪快事はあるまい、人間なんか之れに較べたら全然芥子粒だ、男子須く事を爲すなら、宜しく此噴火山の如くなるべしだ、噴火山！噴火山！然うだ、熱火！熱火！乃公は斷じて熱火となる、噴火山となるぞ、死火山のやうな冷たい人間にはなりたくない、阿蘇に這入つて茲に九州征服の第一歩を起した八郎爲朝は、痛快な梃白兒であつた、阿蘇のやうな噴火山的人物だつた、熊本開市の恩人たる藤肥州だつて虎之助の昔はやはり噴火山だつたぞ、アーツ、實に痛快だ、實に壯觀だ、オイ緒方、この勢ひを見ろまるで唧筒で水を吐き出す如に、火を吐いてゐる、人間も之でなければならん、俺は阿蘇の噴火山を、何時でも背中に背負つてゝやる。」

「アツハツハツハ、池田！大氣焔だなア、そんなに何時までも噴火山を背負つてゐられちや危険だな、貴様東京へ歸つてまたそんなに暴れるつもりかい。」
「馬鹿を曰へ、噴火山必ずしも暴れる意味ぢやアない、まア長い目で見てゐるよ、今に判るから……。」

池田は何と悟入したのか、頗る意氣軒昂の態度で、更に歩を移して舊火口の方に廻つた、而して阿蘇噴火の中心を残らず見物した後、五時頃、例の茶店に歸つて來たのであつた。

(五) 茶店の少女 (一)

定めなき高山氣象の、殊に活火山たる阿火は、その變化一入甚だしく、二人が舊火口を一周して歸る頃から、また空模様がスツカリ變つて、全山墨を流したやう、

それに一種陰惨な風が加はつて、何うやら暴風雨の徴候である。

と、見る間に、モウボツリ〜と落ちて来た、その時には二人とも茶店に歸つて来てゐたが、やがて沛然としてまた驟雨が来る、風が加はつたこととて、戸など開けて置く事は出来ぬ、老爺とお冬とは慌て、組末な藁小屋を立て切つて了ふ。

二人は大に當惑した、此調子では逆も下山ことは出来ぬ、空が晴れても日は暮れて了うだらうし、日が暮れて闇夜の下山は道に迷ふ虞がある、什麼しやうかと互に顔を見合して、床几に腰をかけたまゝ、思案してゐる處へ、お冬が先刻の浴衣を疊んで持つて来た。

『まだ少し襟が湿ッはいやうですけれどアノお召しなすつて下さい、兎ても此模様では下りられませんよ、碌な寢道具もございませませんが、今夜はお山にお泊んなさい危険なうござますから……。』

『濟まないねね、姐さん、いろ〜厄介をかけて、兎に角も少し雲行を見なけりや

ア、什麼することも出来ない、何處の隅でも可矣から、泊めて貰うつもりで、経過を見やうぢやアないか。』

緒方の詞に池田もすぐ同意を表した、日は將に暮なんとするが、雨は愈激しく風は噴火の鳴動に和して、小屋をも吹も飛ばさんす勢ひである、五千餘尺の活火山の頂は、唯風伯雨師の荒るゝがまゝ。

二人も、もう此小屋に泊る覺悟を極めた八月の炎天ではあるが、夜に入つての寒さは、却々に堪へ難い、老爺は圍爐裡に榾火を焚いて御馳走する、浴衣一枚で、毛布にくるまつて暖を取るなごも、追に高山の一夜であると思つた。

緒方の方は然うでもないが、元氣のよかつた池田の方が、却て硫氣に中てられて頭痛がする、眼眩がする、果ては嘔吐さへ催して、折角お冬が疑待てくれる雑炊も一椀を口にしただけで箸を措いた、然し氣の勝た池田は、そんな氣色を暖にも出さず、榾火を圍んで老爺が語り出す昔話に耳を傾けてゐる、夜は全く暮れ切つて、全

山海冥、轟々たる噴火の響と、焰々たる風の音、石を打つか如き横なぐりの雨の音ばかりで、物凄いと此上もない。

老爺は今朝娘が坊中から仕入れて来てくれた、地酒のブンとする熱燗を、さも甘味さうに舌鼓打ちつ、二人に向つて自分の身の上話やら、お冬のことなどを、問はず語りに物語つてゐる。

池田も緒方も、標高五千五百餘尺の活火山の頂きで、くむつけき老爺と磨かない玉ではあるが、妙齢の娘とが、殆んど塵寰を離れた山上に生活するその境遇を、既に傳奇的と見て、好奇心を唆られてゐる時であるから、宛然生きた傳奇小説でも聞くやうな感で、老爺の昔語りを耳を澄した。

老爺は、一合ばかりの地酒に、もう陶然としたらしく、虹のやうな息を吐いて。
「ア、快い心地だ、お冬よ、今夜はもう少し飲んでも可からう、まだ降るね、風も少しはあるやうだ。」

と、此暴風雨を知らぬ顔に平然たる態。

(六) 茶店の少女 (二)

「老爺さん、少しあるやう處ちやアない、全然暴風雨ちやアないか。」

緒方は老爺の詞を聞き答めて、かういふと、老爺は呵々と笑つて、事もなげにそれを打ち消し。

「アハ、ハ、ハ、冗談いふな、お山ちやア、これぐれねの風は屁見たやうなものだこれぐれねの風に消魂た日にやア、八年も九年も、夏だけだつて住んちやア行かれねよ、時に汝さん達は何處から來なすつただ、熊本の人けね。」

「ハア、僕達は熊本が古郷だが、東京の學校に行つてゐるんだ、暑中休みで歸省したから、新噴火口を見るつもりで登山したんだよ。」

池田が斯う曰つた、老爺さんは東京と聞いて急に懐しいやうな眼をする。

「然うかな熊本の人で、東京へ勉強に行つてゐるのか、俺も東京にはいろ／＼深い因縁があつて、娘を連れて行かにやアならね理由があるが、まだ二三年は兎ても駄目だアよ。」

「ウム、さうかね、先刻から老爺さんが、いろ／＼話しをしてゐるのを聞いてゐると、君達父娘の身の上には、何か深い仔細があるやうだね、かうして高山の頂きで、一夜の宿を借りたのも何かの因縁だ、今は學生の身分だけれど、東京へ来るやうなら、また出来るだけの盡力はするがね、差支のない範圍で、話をしてくれ玉へな。」

緒方がかういふと、池田は先刻から昵として三人の會話を聞いてゐるお冬の一舉一動に注目し。

「然うだ、總て傳奇的に出来てゐるよ、而してお冬さん！然うだね、お冬さんだ

つたね、お冬さんはかうして、こんな處に住んでゐても、恐くはないのかね。」

お冬は莞爾して、恥らう色もなく、極めて快活に。

「ねエ、慣れちやつたから、ちつとも恐い事はありませんわ、それに、妾、膽力を養成するのよ……。」

「ナニ、膽力養成、却々難しいことをいふね、お冬さんは學校へ行つたかい」

「ねエ、高等だけ、お山にゐるのは署中休みだけですわ。」

「ウム、什麼も實に、愈出でて愈不思議だなあ、什麼しても小説的の物語があるに違ひない、お父さん、話して聞かしてくれ玉へ。」

池田と緒方とは左右から老爺に迫るのであつた。

「ウム、話して聞さうかの、ナニ俺は昔から見通りの男だが、娘は這んな山に埋まつてゐる女ぢやないぞ、此お冬は實は俺の兒ぢやアね、偉れね人の落胤だよ、深い仔細は曰れねが、熊本でも東京でも可なり名を賣つた、金田五郎と云つ

てな……。」

『ナ、ナニ、金田……先生！、ウム、その金田先生のお子さんですか。』

『然うだよ、汝さん達、金田さんを知つてゐるかの……。』

『知らなくつて什麼するか、金田先生は天下の名士だ、僕達は素より顔も見ないし直接に關係はないが、凡そ熊本人士にして、金田先生の名を知らないものは少からう、僕の父なども先生の御世話になつた一人だ……。』

(七) 茶店の少女 (三)

金田五郎といふのは、有名な肥後の志士で、天下國家の爲めに奔走し、後進の書生を愛して、之を扶掖誘導し、子弟の爲めに極力盡した郷黨の先輩である、その在世中、書生にしてまた先生に親炙しないものはなかつた位である。

金錢に頗る淡い人で、書生のために財を散じたことは莫大な額に達する、従つて

自分は何時も貧乏で苦しんでゐたが、平然として少しも騒がず、一面に豪傑の風があるかと思ふと、一面にまた君子の風があつて、その懐には常に一脈の春風が通つてゐた。

熊本ばかりではない、中央の政界でも名高い大立物であつたが、什麼いふ動機でか、一種の悟りを開いてか、同志の人にも一言も語らず、一夜飄然として、一通の遺書をその親友に残したまゝ、何處へ行くともなく姿を消して了つた、或は西比利亞に行つたともいふし、滿洲に渡つたとも噂されて、トンと所在が分らない、最も強く禪に凝つてゐたので、或は何處か人の知らない山中にでも潛んで、浮世の繁累を絶つたのではないかと、想像する向もあつた、同志が手を竭して、多年行方を捜してゐるが、今日まで既に十年間、杳として消息がない、今では生死さへ不明になつてゐるのである。

そんな性格の人であつたから、失踪するまで妻も迎へず、獨身生活をしてゐた、

その金田に子があるといふのは、寧ろ不思議な事實ではあるまいか。

時代が違ふから、池田も金田五郎を知る筈はない、けれども九生の恩人として熊本人土の間に不朽の名を傳へたその高風遺徳は、常に耳にする處であつた此偉い金田先生の遺児、場所もあらうに、阿蘇山上の茶店に、しがない淋しい生活をしてゐるといふことは、容易に信じ難い話である、池田は硫氣に中てられた、不快の氣分をも打ち忘れて、思はず膝を爐邊に乗り出し。

『老爺さん！金田先生なら、我々書生の恩人だ、天下の名士だ、敬慕すべき先輩だよ、然し、先生は獨身であつたやうに聞いてゐるのに、不思議だね。』

『ウム、先生は獨身だ、女房を持つと足手纏ひで仕事が出来ねわつてな、一生定まる妻がなかつたんだ、だから落胤だといつてゐるだよ……』

『老父さん、モウそんなお話はお止しなさい、見ツともないから、見ず知らずの他人様に、餘計なことをいはなくツてよくツてよ、貴下方モウお寝み遊ばせ、寢道具

なんか、兎ても満足にございませんのよ。』

お冬は、何と思つたか、横合から口を出して、己が過去の罪惡でも列べ立てられるやうに老父の詞を遮つた。

老父もお冬にかう曰れると、其まゝに口を緘んで再び話をつげなかつた、池田も緒方も、何だか手の中の球を取られたやうな氣がして、残り惜いやうに思はれる。

『お冬さん、僕も九州男今だよ、他人の秘密を無暗に他言するやうな事はしないから、モウ少し老父さんに話さして下さいな』

池田は籠るやうにしてお冬にかう云つた、その物越といひ態度といひ、池田の調子は何處となく人懐しい、一種のチャームを持つてゐるので、お冬も池田の詞には什麼しても微笑まれませんにはゐられなかつた。

二人は改めて自分達の姓名や、學校の經歷などをお冬に打ち明けて、他意なきを、

示すのであつた。

(八) 茶店の少女 (四)

お冬は一旦は父の詞をせき止めたが、池田の熱心な態度に絆されてか、將たその人格を信用してか、口にこそ曰はね、たゞ笑つて老父の面を賸め、語れよがしの態度を示した。

老父もその意を解してか、同じやうに笑み傾けて。

お冬よ、池田さんたらいふ人が、あんなに云はッしやるだ、少々べね話さうか什麼だ……。

お冬はまだ笑つてゐた、池田も釣り込まれて、笑ひながら。
「少々で可矣から話してくれ玉へ、ねねお冬さん可矣ねね。」

お冬は頷いて見せた。

「アハ、、、ちやア話すべわか、金田先生はなア、俺には主人だ、主人と云つても先生の家へ奉公してゐたんぢアねぞ、先生が何か御用向で内密話をさつしやる爲に、人目を避けてよく阿蘇の麓に來ただア、先生は阿蘇のお山が好きでなア、氣が結ばれると、此山を登つて、アノ噴火を見ると溜飲がすぐ下がるんだよ、それで此お山の麓に隠居所を拵へて俺が留守番をしてゐたのだ、

「アツ、それで先生は號を蘇山と仰有つたのだな、ウム、判つた、面白い、愉快だ、先生も此噴火山に私淑してゐたんだね、なるほど、先生も噴火的人物だ、噴火山に惚れて、その崇美を謳歌した僕が、此處で金田先生のお兒さんに逢ふなんか、何んだか、かう脈の靈氣が通じてゐるやうな氣がする、愉快々々、ウン……それから老爺さん什麼した。」

「先生はその隠居所に來られると隣家の娘が好で、よく呼んでは話相手にされただ

ア、お冬の母親がそれだよ、お冬を産むと、産後の肥立が悪くつて歸んで了つたア。』

二八

老爺は鬼の眼に玉のやうな涙を泛べて、ホロリとした、お冬はと見ると、顔を反

向けて、之も今昔の感に堪ぬぬ地。

『仔細あつて先生は何もかも内密にされただから、俺が此男の手一つに、産れて三月目から丹精して育てたア、すると、先生はお冬が五つの時に、神隠しのやうになつて、何處へ行つたか判らなくなつちやつただアよ。』

老爺はまた手拭で涙を拭うた。

『眞箇に偉い人で、俺なんぞにもそれはく親切にして下すつただア、それからはなア、勿體ないが先生の愛兒を自分の子にしてな、今日が日まで暮らして來ただアよ。』

『なるほど、よく判つた、それで阿蘇の山にこんなことをしてゐるのは、什麼いふ

理由なのかね……。』

『ウム、それか、お冬は俺の娘になつてゐるのだ、籍からなつてゐるだアよ、だけごな、先生が此お山を好きだつたと聞いてな、孝行だ、阿蘇のお山にゐたらお父様に逢つてるやうだ、またお父様の心地を繼ぐやうなものだつて、夏になるとかうして登つて來て、一つは登山者の爲にもなり、一つには先生に逢うつもりで遣つて來るだア。』

池田も緒方も初めて此お冬が尋常の娘でなかつたことを知つた、と、同時に金田先生とも云はれる人の娘が、這んな悲惨な境遇にあることを、心から氣の毒に感じたが、又退いて考へて見ると、やはり血系は争へない、その豪放快活な氣性が金田先生と同じ性格だと思つて、敬服したのであつた。

二九

(九) 茶店の少女 (五)

池田も緒方も、暫くは無言で、一種の感慨に打たれてゐたが、斯う話を聞いて見ると、急にお冬が偉くなつて、尊敬の念も起るのである、それと同時に、お冬は一體什麼いふ心願を抱いてゐるのか、序にそれも聞いて見たいやうな氣がするので、池田は尙も詞をつぎ。

『イヤ、有難うございました、僕等は今夜此處に泊めて頂いて何んだかいふに言へない尊い教訓を受けたやうに思はれました。然し、それでお冬さんが、先生を追慕するあまり、先生の生前敬慕してゐられた阿蘇の山に登つて來られる理由は判りませんが、何れそれについては何か必ず一つの信仰、マア心願の言つたやうなものが屹度あるでせう、序にそれも聞かして下さいな。』

『ウム、俺にやア、そんな難しいことは判らねだよ。』

と、老爺が素氣なくいふと、お冬は憶する色もなく、ツと面を上げて。

『あア、それでございますか、身には縋縋を着けてゐても、心は錦のつもりで、金田五郎の遺児といふことは秘密にしてゐますが、妾、女だつて父の志を繼いで、屹度父の名を擧げてよ。』

お冬は年に似合はぬ頗る豪膽なことをいふ、年が行かないから、いつてゐることに罪もなく聞けるが、その心の奥には三つ兒の魂百までといつたやうな決意が確に閃いてゐる、形は女でその舉動もまた女らしく優しいが、心は全然男子の意氣である、二人は見ぬ金田先生が、形を女に變へて再生したのではあるまいかと思ふほど、その快活な滞りのない詞にチャームされた。

『然うですか、よく判りました、かうして圖らず此小屋に泊めて頂いて、そんな勇ましい、愉快なことを聞いて、實に血が湧きますよ、僕等はモウ近く東京に歸りま

すが、今老爺さんの話では、何れ東京に行くやうなことです、それは何時ですか。

『そんなことは判らぬねだ、まア二三年は兎ても駄目だアよ。』

『お冬さん、東京へ行くのは、どんな目的のですか……。』

『どんなッて、父は行方を晦ました、必ず東京の近所にあるに違ひないと思ひますので……。』

『ハ、ア、探しに行くんですね、然うですか、我々も郷里は熊本だが、終に東京に永住する事となるでせう、まだ二三年と云つては、我々が什麼變化するか判りませんが、絶わす文通をして、お互に消息を通じるやうにして下さいね。』

『有難うございます、什麼なるか判りませんが、お便りの出来る間は致しませう、貴下方も若も父のこともお聞及びでしたらお知らせなすッて下さいねねお父さん……。』

老爺は頷いてゐる、夜は何時か更けて、小屋の外は雨と風とで暴てゐる。

『さア皆さん、ゴロリと少し横になつてお寝み遊ばせ、明日は晴りませうよ。』

と、お冬は小屋の裏手の戸を細目に開いて、噴火口の方を見上げた、火光は雨夜の闇に映じて赤、黄、白、紫、オレンジ五彩、七彩の美しい色を現して魔物の如く天を衝いてゐる。

『アツ、一寸是處へゐらッしやい。』

お冬は二人を小手招して、戸の隙間から夜の噴火口を指さしつゝ。

『オホ、、、奇麗でせう、妻彼れが大好きなの……。』
と、お冬は意味の深い言葉と共に笑な浮べた。

(一〇) 奇なる縁 (一)

池田正也が阿蘇山上で、金田先生の落胤兒お冬に邂逅してから、既に三年の歳月を閲した。

三四

正也は二年前緒方と共に法科大学を卒業して法學士となり、京橋の八官町に辯護士を開業して訴訟事務に執掌してゐる。

池田正也と緒方時男とは莫逆の友である、中學は勿論高等學校から大學を終るまで始終目的を同じうして進んで来た、唯同じ法科でも正也は主として法律學を時男は主として經濟學を専攻した結果、卒業後は各進る方向を變へて、時男は神田錦町の東洋銀行に奉職してゐた。

職業が派手と質實な相違もあらうが、辯護士として社會に立つた正也は案外に評判がよく、メキ／＼と其信用を高めて今では押しも押されぬ、若手の錚々たる手腕家として賣り出してゐるにも拘らず、時男の方は一介の凡々たる事務員として簿書と紙幣との間に没頭し碌々としてその日を送つてゐるに過ぎない。

また正也は資産も何もの腕一本の身だが、緒方は有名な資産家で、財力が豊かであるから、此點になると、池田は緒方の足許にも追附けぬ、常に緒方の力を借らねばならぬ境遇にあるのだ、緒方も快く今日までは池田の爲に、充分の助力を與へて来たが、さて同じやうに修學して、一朝社會に立つとなると、自分よりも池田の方が世間に持て囃され且つ推重されるので、それが不快で堪まらない、緒方は所謂富豪氣質で、金力は天下の何者をも左右するやうに考へてゐる、従つて池田のために多少の資金でも流用してやつたことを思ひにして、彼を乾兒扱ひにしやうとしてゐたのであつたが、それが却て冠履顛倒したので、此頃から少しづゝ池田の行爲に對して反感を抱き、すべて反對に立つやうな傾向を見せて来たのである、二人が管鮑の交はりは暗黙の中に相乗離せんとしつゝあるのだ。

池田は學生時代から、金田先生を崇拜するほどあつて、何處かに豪傑肌の俤を止め、若いに似合はず、襟度も廣く、何事にも括淡寡慾で、極めて功利の念に薄い男

三五

であつた、従つて金銭上の問題には至つて無頓着である。

彼は緒方の心に、這んな邪な分子を生じてゐやうとは夢にも思つてゐなかつた、従つて緒方の昨今の素ぶりや交際ぶりに少しづつ、妙な傾向が現れてゐるにも気が附かず飽くまでも莫逆の友として、其人を信じ、其人を尊敬してゐたのであつた。

正也は今日しも、刑事の可なり大きな事件で、地方裁判所の公判廷に出廷し、滔々懸河の辯を揮ひ、今辯論を了つて辯護士の控所に歸つて來た。すると、其處にゐた二三人の若手連が、正也の顔を見ては「ニヤ〜と笑ひ出し、

『イヨ〜色男、什んな辯論をして來たんだ、神聖な法廷ですぐ女に岡惚が出来るんなか、道に池田先生だよ、アハ、ハ、ハ。』

『辯論は大向うのヤンヤ〜を博す、女はその辯論に酔されて岡惚れる、それぢやア、辯護士も役者のお株を取つて了ひさうだ、オイ池田君、奢れ〜、新橋か柳橋か、イヤ手近い所で赤飯あたりでも可矣よ。』と高聲にドツと擲擲するのであつた。

池田は何が何やら、更に合點行かず、其の張のある顔として、而かも愛嬌満るやうな眼許に笑を見せて。

『何んだい、出て來る早々、冷評かされるなんか、氣が利かないなア、何が可笑しなことでもあつたのかね。』

正也は怪訝な顔をして一同を見廻した。

(一) 奇なる縁 (二)

池田が怪訝な顔をしてゐるのを見た、吉田といふ悪戯好きの辯護士は突如その背後に廻つて、ボンと池田の肩を叩きつゝ、一葉の小形名刺を池田の面前に突き出し。

『オイ是れだ〜、お安くないな、先刻から君を待ちかねて應接に待つてゐるんだ

よ、早く行つて遣り給へ、大方君のスタイルが伊井に似てゐるんで、張りに来た新しい女の連中かも知れない、ハイカラの別嬪ださ、幸ひ池田君はまだ獨身だから可矣が妻君でもあつたら騒動ものだぞ、アハ、。』
池田は何の氣もなく其名刺を手にとり取つて見ると、金田冬子とあつたので、思はずアツと叫んで顔色を變へた。

『さてこそ、此奴偶發犯ではない、慣習犯だ、怪しからんぞ。』

面白半分には連中が騒ぎ立てるのを、池田は耳にもかけず、

『アハ、、そんな意味のある女じやないよ、それにしても可怪しいなア……。』

池田は不審に堪へないやうに、獨言を曰つて小首を傾け、そのまゝツカ／＼と控所を出て行つた。

金田冬子！、彼は實に阿蘇の孝女お冬であつた、肥後の國土金田先生の遺兒冬子であつた、阿蘇山上で逢つた時は、まだ十五の少女で、隠れた珠玉に過ぎなかつた

が、別れて以來丁度五年、今年は既に二十歳の水に、その天然の美を洗ひ清めて土に塗れた珠玉は燦然として性來の光りを發した、冬子は見違へるばかり美しい女となつてゐる。

然しその面差は阿蘇山上にあつた時も今も少しも變つてゐない、色がクツキリ白くなつたので、女ぶりが三段も五段も上つた、而して田舎育ちの野暮な土臭い分子が失くなつて、全く都化會したスタイル、別に綺羅を飾つてゐるでもなく、白粉氣など微塵もない、髪を可なり大きな庇に取つて、くすんだセルの單衣に銀ネズ色の鶉縮緬の單羽織を羽織り、淑雅に椅子に腰を落してゐた。

正也はお冬の變つた姿に、まづ一驚を喫して、無言のまゝ見惚れてゐるのであつた、それと見た冬子は、ツと椅子を離れて、愛嬌のある聲で。

『什麼も池田さん、お久しぶりで……。』

相變らず快活な物の言ひやう、正也はモウ引き附けられたやうに覺れた。

「オウ、お冬さんですか、冬子さんでしたね強い變りやうで、すっかり見違へて了ひました、然し御無事で、よく御尋ね下さいました、彼れから二年ほどの間は御手紙で御消息も判つてゐましたが、その後は手紙を出しても符箋が附いて戻つて來るので、什麼なすつた事かと思つて緒方とも始終お噂をしてゐたことでしたよ。」

「オホ、、然うでございますか、お心にかけて下さつて有難うございます、まあ何からお話致して宜しいやら……先刻事務所の方に御伺ひ申しましたが、裁判所へ御在になつて、お歸宅も判らないといふことで、不躰ではございますが、裁判所へ參つたのございます。」

と、冬子は何か急ぐ用事でもあるやうな口吻であつた。

(一一) 奇なる縁 (三)

隅田の河畔、前は小梅の水戸邸、名高い枕橋を枕にした東京一の割烹店、川に面した奥まつた四疊半に、池田正也は金田冬子と相對して坐つてゐる。

「這んな處へ御同行申しては失禮ですが裁判所ではお話も出来ませんし、宅と申しても男ばかりの生活で……、アハ、、然しよく僕の宅がお判りでございましたね、何時東京へ出てお在になりましたか。」

池田は裁判所から冬子を、是處に同行して、夕食を共にしながら、まづ其消息を聞くのであつた。

「妾、モウ三月ほど前から、東京へ參つてゐるのでございます。」

「ナニ、三月ほど前から、道理で手紙が通じない譯です、それにしても、三月も前から出京してゐられたのなら、一度位訪れて下さつても、宜かつたぢやありませんか、其で老爺さんも一緒ですか。」

「ね、老父も一緒にございます、一度お尋ね申さうと思ひながら、ツイ御無沙汰

を致しまして。』

「で、今は何方にお住ひです。』

「牛込の二十騎町に居ります。』

「然うでしたか、何しろ三年の昔になりますからなア……。』

池田はかう曰つて、一寸思案してゐたが、やがてまた、語を繼いで。

「冬子さん、貴女との再會を緒方に洩らすのは穩ではありませんな、後で話しをして
も怨むでせうから、電話をかけて呼ばうと思ふが什麼でせう、お差支はありません
か」と手を叩いて女中を呼ばうとする、冬子は慌て、それを引き止めて。

「池田さん、什麼ぞ暫らく……妾、今貴下にお話をするのは秘密のことでございま
すから、緒方さんのお在でなさらん方が都合が宜しいのでございます、お呼びなさ
るに致しましても、一通り妾の話を聞き下すつた上に願ひたいのでございます
わ。』

「ソ、然うですか、ちやアアお話しを承りませうか。』

池田は不承不性に、斯う言つた、冬子は何か言ひ出しさうにしては控へ、極り悪
げに池田の様子を打ち成る、二人は暫らく手持無沙汰の體である。

「什麼したのです、冬子さん、その秘密の用事と仰有るのわ。』

「アノ！、甚だ不躰でございますが、池田さん、貴下のお父様は若しや、芳則さん
と仰有りは致しませんか。』

「アハ、何をお聞きなさるのかと思つたら、僕の父の名ですか、然うです芳則
と曰ひました、舊式の代言人上りの辯護士で、……それが何か御用ですか。』

「やつぱり然うでございましたか、それでしたら貴下のお父さまは、妾の父をよく
御存じの筈でございます。』

「無論父は金田先生のお世話になつた男です、その事は僕も仄に聞いて居りますが、
何しろ僕の十四五の時で……。』

「實は池田さん、妾、父の消息について少し手索が付いたのでございます、それが
 什麼やら、貴下のお父様に關係があるらしいのでございますが……。」
 冬子の詞がまだ終らぬ中に、正也は膝を乗り出しつゝ。
 「僕の父が、金田先生の失踪に關係がある？、而して先生の手索りがつきましたと
 ……ウム、それで什麼しました。」
 冬子が意外な物語に、池田は詞忙はしく詰るやうに聞く。

(一三) 奇なる縁 (四)

既に冬子の生立に多大の好奇心を陵られてゐた池田は、今また突如として、冬子
 の口から、自分の父が金田先生に關係があると聞いては、一層の興味を感ぜざるを
 得なかつた、彼は詞忙しく冬子に詰め寄せるのを、冬子は靜に制して。

「事の次第は詳しくお話ししますが、夫よりも前にお伺ひ申したいのは、貴下のお父
 様の事でございます、お父さまはまだ御存命でゐらっしゃいますか……。」
 「父ですか、父はモウ没しました、八年ほど前でございます……。」
 「エ！ツ、お父様はお没れ遊ばして？八年前に……。」
 冬子は吃驚して思はず鸚鵡返しに斯う聞いたまゝ、俄に失望した如く、悄氣返つ
 て俯首た、仔細がなくてはならぬ。
 「父が没したに就て、ド、什麼してそんなに失望なさるんですか、兎も角も理由を
 お話なすつて下さい、黙つてゐては判りません。」
 正也は慰めるやうに冬子を促した冬子は幾度か溜息を吐て、
 「什麼して妾は、這んなに薄倅なのでございませう、折角手索になると思つた貴下
 のお父様の事を尋ね當てたと思へば、その方はモウ世に亡い……。」
 と、いひかけて、何か思案した如く、又氣を取り直して。

『併し池田芳則さんに關係があるのでございますから、貴下が何かお聞きになつてゐることがあるかも知れませんが、兎も角も一通りのお話を致しませう、斯ういふ譯でございます、一體父には陸軍の軍人で、加藤祐政と仰有るお友達があつたのでございませう、此方をお尋ね申したら少しは父の事が判るだらうと、お知らせ下さいました人がございますので、その加藤さんを探すために、老爺と一緒に、東京に出て参り、陸軍といふのを傳手に探しました處、モウ一昨年大佐で豫備にお成り遊ばしていらつしやるのでございます、お面にかゝつて段々お話を致しますと、池田芳則と仰有る、貴下のお父様のことが判つて参りました。』

『フーン、加藤！僕はそんな人は知りませんがね……。』

『左様でございますませうとも、先方でも貴下のご事は御存じないので、その加藤さんのお話に依りますと、父は大層貴下のお父様を御信用申して居りましたさうで、大低の秘密は池田さんに打明けて話してゐたさうで、父が失踪する時にも、池田

さんだけには自分の目的や方針を物語つて、或時機の來るまで決して口外してはならぬ、口外せぬと男と男の約束で別れたさうで、池田さんはその約束を堅く守つて何誰にも口外しなかつたばかりか、全く知らぬ顔で通してゐた、といふことが判つたのでございます、ですから、その池田さんを尋ね當て當時の事情を聞けば、屹度父の消息が判るに違ひない、何の目的で、這の方面に向つたかといふことが判るに違ひないと仰有つたのでございます、然し池田芳則といふだけで全然雲を掴むやうな尋ね物、二三ヶ月といふもの、それを尋ねるのに、どの位苦心をしたか知れないのでございますよ。』

冬子は斯う曰つて、傍の微温茶を取り上げ一息吐くのであつた。

(一四) 奇なる縁 (五)

『それに就いても、加藤大佐が種々骨を折つて下さりまして、池田の息子が東京に出て、辯護士をしてゐるさうだといふことを、探つて下さいましたので、貴下ことを思ひ出し、若しや然うではないかと、老爺とも相談した上で、ヤツと貴下をお尋ね申し、芳則様が貴下のお父様だと判つて、ヤレ嬉しやと思へば、その方はモウ此世にないと仰有つて、妾、眞箇に失望して下りました、然し、貴下は御息のことでもあり、何かお父様からお聞及びのことでもあるか知れないと存じまして……』

冬子は語り了つて、正也の答を待つやうに、沈その面を射た、正也は腕を組んで咳一つせず、冬子のいふ所を傾聴してゐたが、その時力なさうに腕を解いて。

『ア、然うですか、すると金田先生の行方は、僕の父が一人知つてゐた譯なんですね、什麼も實に不思議な奇縁だ、然し残念乍ら僕は父から何事も聞いて居りません、第一父が没つた時は、東京で修業の眞最中でしたから、危篤に陥るまで僕の處へは病氣と知らさなかつたのです、僕がそんなことを聞いてゐましたら、阿蘇の山上で

お目にかゝつた時に。奇過を語るべき筈ぢやアございませんか、母でも生きてゐたら、多少は何か聞いてゐたかもしれませんが、之も昨年没しましたし、今日では殆んど手掛りになる材料がございませぬ、實に残念です、這んな不思議な奇縁が判明して、貴女と僕との間に深い因縁のあることが知れてゐながら、手掛りになる端緒がないといふのは如何にしても残念ですなア。』

正也は我事のやうに言つて、之も吐息を吐いた、冬子は折角認めた一道の光明を再び闇に包まれて、その失望、落膽殆んど形容することが出来ないほどであつた。

『ソ、そんなら、アノ、お母様もお亡なり遊ばしたのでございませぬか、妾、ド、什麼しませう……』

冬子の失望は終に堪へ切れなくなつたか、我にもあらで、其處に俯伏して、忍び音に泣いた、正也も何んと慰むべき詞を知らなかつたが、此場合冬子に力を附けることが自分の義務であると信じて。

「冬子さん、御有理です、同情します、然し決して失望することはありません、金田先生が僕の父と深い關係があつたものと判明した今日、此問題は貴女一人の問題ではないのです、父でも金田先生に貴女といふ遺兒があつたことを知つてゐたら、恐らく死ぬまで秘密は守らなかつたでせう、父計りではありません、當時の關係者が皆貴女あることを知らなかつたのですから、之も運命です、失望せずに探しませう、或は家捜しでもしたら、何か記録でもあるかも知れません、僕もかう聞いては黙つてゐられないです、誓つて一臂の勞を添へますから、落膽せずに更に大いに努力して下さい、ね、冬子さん。」

正也は熱誠と溢るゝばかりの同情とを以つて、冬子を慰めた、冬子も之に太く動く。

(一五) 啜血の誓 (一)

枕橋の八百善に相會して語つた池田正也と、阿蘇の孝女金田冬子との間に相通じてゐる關係は、實に不思議な因縁を孕んでゐたのであつた。

正也はその夕、堅く冬子を助けることを誓つて、袂を別つた。事務所に歸ると、何か手掛りになるものはないかと、俄に家捜しを初めて、亡父の書いた記録、斷片などを魂よく探し廻つた、凡そ三日許りもかゝつて、何か古い日記のやうなものを發見した、それを讀んで行く中に、手索りでも得たものか、正也はそれを懐深く納めて、二階の書齋に持ち行き、手提金庫の中に人知れず納ひ込んだ、而して忽に車夫を二十騎町に走らした、二時間ほど経つと、冬子はいそゝとして正也の許を訪づれた。

正也は之を書齋に導いて、堅く襖を閉ぢて了つた、書生の車夫は、訝しさうに何か密々と噂をしてゐる様子。

『冬子さん、丁度三日が、りで、何か父の書いたものでもないかと思つて、家探しを繼續したのです、所が先刻長持の底の方から、父の手記した日記のやうな、備忘録のやうなものを、発見したんです、十四五年も前のものでせう、ズーツと讀んで行くと、妙なことが書いてあるんです。』

冬子は思はず膝を乗り出した、そして詞忙しく。

『何か、手索りになることでもございましたか？』

と、胸を躍らして聞いた、正也はかの、手提金庫の鍵を開いて、小形の手帳を取り出した、而してそれを、幾枚か繰り擴げた後、要所を指さして。

『此一節を讀んで御覽なさい、鉛筆の走り書で、おまけに、紙が摺れてゐますから、頗み讀み悪いです、全く摺れ切れて讀めない所もあります。』

冬子は正也の指した所を、體を前かゝみに覗き込むやうにして、何故とは知らず躍る胸を抑へながら、讀み下した、如何にも讀み悪さうで、幾度か小首を傾けて、判讀に苦んでゐる、正也はそれと見て。

『讀めませんか、讀めないでせう、僕が讀んで上げます。』

かう曰つて、小さな聲でその全文を音讀した、手帳には這んなことが書いてあつた。

□□金蘇山夙に圖南の志あり□□に告ぐるに□□□□し、飄然として滿洲□□□奇傑のなす所凡て奇たり、一人知遇を□□□感佩措く能はず□□□……。

『什麼ですか冬子さん、之が金田先生の消息を洩らしたものではありませんか、蘇山は先生の號です、金は金田の金を取つて金蘇山と、態と支那人式の名にしてあるのではないかと思ふのですが……注意に讀んでは氣が付きませんが、かうして注意して讀むと、什麼も然うとより思へないのです。』

正也は読み終つて自分の思ふ所を述べた、冬子は心臓の鼓動を抑へつゝ、希望に輝く目を舉げて。

『ソ、然うでございませす、確にそれに違ひございません、時代は何時頃でせう。』
『それが判らないのです、何しろ這んな雑駁に書き散らしてあるんですからな、然し此手記に依ると、先生は正しく滿洲に渡つたらしいですね。』

(一六) 啜血の誓 (二)

冬子は一旦仰いだ光明を、芳則の死に依つて打消され、太く失望したもの、今正也が此手帳を發見したことに依つて、雲に隠れた月の、極めて微に光を仰ぐ如く感じ、喜び極つて。

池田さん、有難うございました、それに相違ありません、父は滿洲に渡つたので

す、確に支那にゐるに違ひございません、之で父の向つた方面は確に手掛り附きました、ア、有難うございませす。』

手帳を手に持つたまゝ、いそ／＼してその胸を躍らすのを、正也は靜に制して、冬子さん、まだそんなに喜ぶ程度には達してゐません、此手記には『たゞ飄然として滿洲口とあるだけで、僅に滿洲に渡つたと云ふ想像を下すだけに過ぎないのです、滿洲と云つても實に廣い所です、大連から長春、哈爾濱あたりの鐵道に浴うた都會ならずにも判りませうが、十何年間消息を絶つてゐる位ですから、そんな賑やかな處に隠れて居る理窟はありません、假りに滿洲に渡つたとしても、僕は屹度人跡稀な山奥にゐられるだらうと思ふのです、何しろ日露戰役よりも二三年前のことですから、ですからそんな手近い所にゐられたら、今日まで發見されない道理はありません、而うすると全然雲を掴むやうなもので、何處から手を出して可矣か判らないぢやアありませんか、第一僕が心配するのは……。』

是處までいつて正也は何政か、その先を言ひ盡る、冬子は俄に顔の色を變て。

『し心配すると仰有るのは……ド、什麼いふことでございます。』

左も不安に堪へぬらしい様子で、正也の詞尻を突ッ込んだ、正也は指を折つて切りに何か數へながら。

『先生は僕の父と同年位ですな、失踪された時はお幾歳でしたか。』

『たしか四十三のやうに聞いて居りますのよ。』

『然うすると、父より五つ齡下ですね、今年が五十六か七にお成りでせう、さア僕の心配するのは、甚だ不吉の詞ですがね、その、先生の安否です、つまり生死の問題ですな、第一に生死が什麼であらうかと、それが心配で、一番先に胸を突いたのです……。』

正也は心配さうな顔で、かう云つて沈と考へ込んだ、冬子は今までの元氣は何處へやら、正也の此詞を聞くと比としくそれを有理と感した。

『池田さん、ド什麼しませう、妾、たゞ此手掛りを聞いて、嬉しかつたものですか、其處まで氣が附きませんでした、ド什麼しませう、父はシン死んで了つたのございませう……。』

オロ／＼聲になつて、正也がそれをしてゐるものゝやうに聞く、正也は同情に耐へない面持で。

『ですから、却々樂觀は出來ないので、前途頗る遠遠、且つ非常な努力と細心な注意を要します、ア、それにしても、父が生きてゐたら……愚痴ですけれども、残念ですなア、此手記で愈金田先生と父との關係が頗る深いものであつた事が證據立てられました、父と先生の間にか秘密な計畫でもあつたに相違ない、然う思ふと、冬子さんと阿蘇で邂逅したのも、何か深い暗示があつたやうに思はれてなりません、然うだ深い暗示だ、深い因縁だ。』

正也は感慨無量の體で、獨言のやうにいふ。

(一七) 啜血の誓 (三)

冬子は正也の詞を聞くと共に自分が失踪した父の行方を尋ね出すことの容易ならぬ大事業であることを自覚し、不安は刻一刻と其小さい胸を襲ふて、今はたゞ此親切な頼もしい池田正也を力と頼むより外に道がないと思つた。

『池田さん、妾、眞箇に心細くなりました、什麼したら宜しいのでせうか、萬望深い因縁と思召して、頼りのない此冬をお助けなすつて下さい、お願でございます、老爺があつても、是から先の方針を決めるには、兎ても妾の相談相手にはなりません、加藤大佐もありますけれど、妾、此間お眼にかゝりましてから以來、只貴下ばかりを力にしてゐるのでございます、之が何かの因縁でございます、屹度、屹度、お力をお貸なすつて下さいまし……』

冬子は情に耐へぬやうな目を見上げて凝と池田の態度に注目してゐたが、何ともしらず胸中に高波を打つ感情を抑へ得ぬやうに、我を忘れてと右手を伸ばし、臂を組んで黙想してゐる池田の膝に絶り附いて、その身を伏せつゝ、聲を忍んで泣いた。

感情に強い、而して温かい血を持つてゐる正也は、此一刹那一種いふべからざる胸の動悸を覺えて、投げかけた冬子の背にその右手を乗せつゝ、面は血汐に燃わた熱し切つた熊で、詞に力を籠め。

『冬子さん、大丈夫です、僕は必ず貴女を助けます、貴女が金田先生の遺児なら、ボ、僕も先生と相許した池田芳則の忤です、孤獨の貴女を此まゝに什麼して見捨てられませう、誓つて全輻の力を搜索に注ぎます。ア、安心して下さい、心配することはありません。』

正也の詞に熱烈火の如きものがあつた、冬子はその詞に一層刺戟を深くしたと見て、殆んど上氣したやうに、顔を火の如くに、眼は希望に燃ゆるものゝ如くツと

身を起して莞爾と笑を漏らしつゝ。

『ア、有難うございます、冬子が貴下を得たことは百萬の援軍も同様でございますその堅い誓ひ、それを尙堅くなるやうにオ、お願ひがでございます。』

と、冬子は雷ならぬ態で、吃と池田の面を射るやうに見た。

『オ、何なりと……希望に應じます、さア曰つて御覧なさい。』

正也も嚴然としてかういひ放つた、冬子は無言のまゝ、熱した面を更に紅の如くにして、矢庭にその左の小指を、ツと口に含んだと思ふと、力を籠めてキリツと噛んだ、血汐は忽ちホタ／＼と其處に滴るのを、手早く傍にあつた茶呑茶碗にグツと受けて、適にその狂的な舉動に驚いてゐる正也の前に突き出した。

女の一念、端たないとお笑ひ下さらずに此心……、此不安な胸、さア血を嘔つて哀な冬を安心さして下さい、イ、池田さん、コ、此中へ貴下の熱い血汐を……さア今、燃わてゐる赤い血汐を、血汐……』

冬子は低いけれども、底力のある、凄い聲で恚う叫んだ、而して淋しい笑を洩らした、何等の凄艶！、何等の悲壯 冬子の感情は今やその極度の高潮に達してゐるのであつた。

(一八) 嘔血の誓 (四)

正也も今は騎虎の勢ひ、彼とて九州健兒である、此場合常識の判断を許すやうな餘地はなかつた、冬子の狂的、而して凜として胃すべからざる決心に、殆んどメスマライズするかの如く、頗る昂奮した態度で、机の上に横はつてゐた鉛筆削りの小刀を執ると共に、同じく左の小指を颯と傷つけて、流るゝ血汐を冬子が突き附けた碗中に受けた、赤き心の異性の血潮は、碗中に混和して渾一された、冬子は嬉しさうな笑に泛べて、グツとそれを飲んだが、まだ半ば残つてゐる、黙つてそれを正

也の前に置いた、正也も笑ひながら黙つてそれを受けて、残れる半分をグイと飲み干し、急須を取つて冷めた茶をその中に注いでまたそれを飲んだ。

冬子は、ヤツと元の座に就いて、全く安堵の胸を撫で下した如く、飽かず正也の姿に見入り。

『お恥しうございます、ド、萬望お許し下さいまし、此誓ひ永久に忘れずに。』
かう曰つてまた道に恥入る如く差し俯向いた、池田は眼さへ眩むやうに、身内が引き締るやうに覺わて。

『モ、勿論です、ボ、僕は胸が躍る、心臓に波が立つ……。』

ど、胸を抱いて激し來る情を抑へやうとする、冬子は尙俯向いたま、

『ア、、、妾も、妾も、コ、戀、愛、ア、、、フ、不思議でございます。』

ど、大膽にその心を表白した、正也は初めて重荷を下したやうに、優しい笑を泛べて、凝と冬子を見入りながら。

『戀！愛！、冬子さん、戀でせうか、戀であつたら貴女什麼します。』

『ソ、そんなことを……お聞きなされるのはサ、残酷でございます。』

冬子は萬斛の思ひを包んで、恥しさうに又も差し俯向く。

『戀です、戀です、意氣に感じて我々は知らず、戀に陥りました、オウ、それよりか冬子さん、小指からまだ血が滴れる、ホ、繃帯を……。』

正也は袂を探つて、新しい半巾を取り出し、それをびりりと細く二筋割いて、その一つを取り、ソと膝を摺り寄せて、自ら冬子の指に繃帯をしてやつた。

冬子はそれを拒まうともせず、寧ろ嬉し相に、正也がなすに任せてゐる、正也は冬子の指を巻き終ると、自分も他の一筋を取つて、くるくると判らぬやうに、小指に巻いて三年前阿蘇の山に培つた二人の仲の愛の種は、その奇しき因縁に依つて感情の高潮を煽られ、茲にその結合を見たのであつた

正也は机の上にあつた、ウヰスキーの瓶を取つて、それを二三杯呷りながら、初

めて快く大笑し。

『アハ、ハ、ハ、今日は實に愉快です、冬子さん、僕は満足です、二人の運命はたゞ成行に任せませう、血を啜つた目的は、戀ではない、愛ではない、それは第二の問題です、今夜の血盟に依つて戀が副産されたとしたら、それは月下氷人の爲すがまゝに任せませう、ねえ。』

『ソ、然うでございませうねえ……』

二人は漸く元の態度に還つたらしい、互に意味の深い詞を交換して、その面を凝と見合ひつゝ、心地好げに笑つた。

(一九) 啜血の誓 (五)

熱し切つた二人の感情は、次第に平調に復して元の態度になつたものゝ、夫から

は詞の調子さへすつかり變つて、温かい親しい、全く戀人同士の語らひであつた。やがて冬子は、話頭を元に返して。

『斯うして、貴下といふ有力な後楯を得ましたについても、さて是から河原方針を取つて父の行方を捜したら可矣のございませうか?』

と、正也の心を計りかねたやうに聞く正也も初めて我に返り。

『さア、僕も今差し當つて甘い考へも出ませんけれど、兎も角先生が満洲に行かれたことを事實と見て差支ないでせう、ですから主として満洲を探すより外に途がありません。』

『では、満洲に渡らなければなりませんね、満洲に行くにしても、何處を目的に捜したら可矣のでせうか、全然雲を掴むやうで……』

『然うですとも、たゞ満洲といふだけで、態々彼の地に渡ることが什麼して出来るものですか、そんな早計なことをしては不可ません、僕の考へでは先生ほどの人物

六カ
 が、たゞ茫乎と満洲人の間に交つて平凡な月日を送つてゐる氣遣ひはありませんか
 ら、生存してゐる限り、例へば馬賊の隊長になつて一方の牛耳を取つてゐるか、炭
 礦でも發見して富源の開拓に着手してゐるか、何れ何か一つの仕事をしておられや
 うと、直覺で想像するんですそれから、まづ方針を定めて、能ふ限り、滿洲方
 面の知人に頼まう、それにはやはり、軍隊の手が必要で、オウ、然うだ、之は加
 藤大佐に相談してその智慧を借ることが最も急務です、僕が一つ大佐に會つて、よ
 く御相談をしますから、冬子さん、日を期して大佐に紹介して下さい○』
 『それでは貴下が加藤さんにお會ひ下さいませうか、而うして頂けば此上もありま
 せん○』

『然うしませう、それからモウ一つは緒方です、緒方は滿洲に知人を多く有つてゐ
 ますから、彼れにもよく相談して見ませう、第一貴女と再會したのに、アノ時の同
 行者たる緒方を除外するのは穩やかではありませんよ、八百善の時は止むを得ず秘密

にして置きました、今後も貴女と數々往來することになれば、緒方を缺いで置い
 ては宜しくないです、今日初めてお尋ね下さつた體にして、是からすぐ彼を呼びま
 せう、而してよく此話をして緒方にも充分盡力させますから……○』
 『然うでございますか、緒方さんに逢はない譯には參りませんわね、でも貴下のお
 父様と父との關係は仰有らずにね……○』
 『エ、そんなことは僕の胸にあります、お任せなすつても大丈夫です、巧く話し
 ますから……○』

『オホ、、、、然うでございますか、それにしても緒方さんがお出になるのに、二
 人とも指の縋帯は可笑しうございますわ○』

冬子は縋帯した自分の指に見入りながら、サツと面を赧くして、斯う言つたのも
 道に女の情である、正也も笑ひながら頷いて。

『おほきに然うですな、モウ血も止まつたでせう、取つて置きますかな○』

(110) 猜疑の眼 (一)

その夜池田は書生に命じて緒方の許に電話をかけた。緒方はすぐに俥で駈付けた、時男も見違へるばかり美しくなつた冬子を見て、懐しさに堪へなかつたか、三年前の阿蘇山上の物語りに、更酣くるまで三人興を遣つたのである。

正也は酒や肴を命じて、快く盃を挙げ、例の金田五郎の失踪一件を持ち出し、唯冬子の手で満洲にゐるといふことが別つたので、それを搜索するため、冬子が上京したのであると物語り、自分の父が金田先生と關係のあつた事や、例の古手帳の発見に依つて端緒を得たことや、加藤大佐の盡力してゐることなどは全然話頭の上さず、無論吸血の盟ひなど腰にも出さずして、今後冬子のために一劈の勞を取ることを依頼したのであつた。

緒方は快くそれを引き受け、早速手索りを求むるために、搜索の方針などを三ツ巴になつて相談し初めたが、何故か冬子は、緒方の云ふことにあまり注意を拂はない、そして正也の意見には熱心に耳を傾けるのが、歴々と其處に映る、近來正也に對して兎もすれば不快の感を感じ起してゐる時男は、早くも自分を前に尋ねないで、池田の方に走つたことに思ひ合せて、意味あり氣な想像を逞しうした、同時に冬子の頗る美人になつたことが、自分の心を惹き付けられる様に思つて、一入快よからぬ感じを起した、併しその夜は、何氣なく池田とも冬子とも別れたのであつた。

緒方はその後、それとなく正也の態度に注意し初めた、注意して見ると思ひ做しかは知らぬが、かの夜以來正也の様子が變つたやうに思はれる、兎角物を思案する様な傾向があつて、金田先生のことには託し冬子の事を突ツ込んで聞くと、詞を曖昧にして、奥歯に物が挟まつたやうなことをいふ、什麼も二人の間に秘密が横たはるやうに思はれてならぬ、然う思ふと緒方は何故か知らぬが、不快の感がムラ／＼と

薄く。

近來あはり池田の宅へ、繁々出入しなかつた緒方が、それ以來昔のやうによく尋ねて来る。莫逆の友と信じ切つてゐる正也は、別にそれに對して際立つた想像を下しては居らぬけれども、緒方の方は然ではない、何か二人の間に秘密でもあるものと見て、それを嗅ぎ出さうとしてゐるのであつた、正也はそんなことは夢にも知らぬ。

彼の夜を隔て、から一週間ばかり後のことである、緒方は夕方からブラリと池田の許を訪づれた。

丁度冬子が來訪してゐた、二階の書齋で何か秘々話をしてゐる、それはいふまでもない、金田五郎一の件で、加藤大佐を訪問するについて、の打合話をしてゐたのであつた。

緒方は親友の間柄でもあり、書生の取次も待たず、ツカ／＼と打ち通つて、サツ

サト二階へ上つて行つた、之は何時の例で、別に書生や車夫の注意を惹く事柄ではなかつた。

然し書生は先に立つて案内をしてゐる緒方はその後についで。

『何處だ、客間か、ウン書齋か……。』

獨り言のやうに曰つて、書生がツと襖を開けると、ついでに其處に這入つた、すると、正也は意外にも冬子と差し向ひで、何か密々話をしてゐたので、緒方はさてこそと曰はぬばかり、忽ち鋭くその眼を八方に働かしたのである。

(一一) 猜疑の眼 (二)

襖をガラリと開けて這入つた書生の後に續いて、何氣なく書齋に打ち通らうとした緒方は、其處に冬子が正也と對座して、何事か秘密話をしてゐたのに、緒方の姿

七二
 を見るとバリタと止めて、二人とも狼狽した様に此方を見たので、彼は事の意外に驚くと同時に、早くもその猜疑の眼は鋭く光つて、かねての想像通り二人の間に、何か秘密の蟠ることを直覺した、けれども、咄嗟に何気なき體を装つて、極めて快活らしく。

『ヤア、これは〜何時の調子で、取次も待たずに飛び込んで來たら失敬したな、珍客だね、這入つても可矣だらう。』

と、注意深い眼で冬子を一瞥し、ドツカと其處に坐つた。

冬子は無言で挨拶をした、正也は折が悪いと思つたが、素より隔意のある友ではないから、快よく座を引いて。

『ウム、よく來た、丁度可い處だ、今冬子さんが見えてね……』

正也がぬからぬ顔で調子を取つたため、冬子も改めて鄭重に挨拶をなし。

『什麼も先日はいろいろと御無理をお願い致しまして……、一寸池田さんのお門を

通りましたので、御邪魔を致してゐた所でございました。』

と、之もその場を取り繕つたが、緒方の刹那に映じた猜疑の眼は、素より腹の中で之を冷笑するに過ぎなかつた。』

『然うでしたか、それは〜、然し池田はまだ獨身ですから、昔馴染の若くつて美しい冬子さんの來訪は、大に社會の注目を惹きますよ……アハ、ハ、ハ。』

緒方は傍者無人に放言した、そして邪氣のないやうに豪傑笑ひをしたが、池田は此禮なき詞に、冬子が立腹しはすまいかと、窃とその様子を窺み見ると、果して冬子は不快な顔をしてゐた。

『オイ〜緒方、御婦人の前で何んだ、そんな亂暴なことをいふなよ。』

笑ひながら窘めると、緒方は再び大きく笑つて。

『然うか、ヤア失禮しました、冬子さん悪く思つて下さると困りますよ、冗談です〜。』

何氣ないふりで打ち消したが、冬子は初めから意氣の合はない、いやな男だと思つてゐる緒方に、突如こんなことを曰はれたので、胸はムカ／＼して、當然なら是處で一矢酬ゐる處だが、正也の見る前を考へて、それでも、我慢して何事も曰はなかつた。

緒方は今かういつてゐる冬子が、既に正也と血を吸つて盟ひを立てゝゐる間であるとは、神ならぬ身の知る由もなく、唯冬子が自分を疏外して、一人窃に正也を訪ふてゐることを不快に感じた、冬子は必ず曰くのある曲物であらうと、早くも察した。而して咄嗟の間に彼の生立を考へて見ても、決して尋常の女ではない見てゐるので、成るべくは此場で二人の舉動を探らうと、例の金田問題を手蔓に、種々の想像談などを仕かけて見るが、冬子はたゞ憤ましくそれに受け答をするのみで、少しも要領を得させない、而してよい機会を圖つて。

『何かお話もあるやうでございますから、妾は失禮致します、然し緒方さんくれぐ

れも父のことを。』と、愛想よく曰つて、緒方が切りに引き止めるのを介はずサツサと席を立つて池田の許を辭した。

緒方は聊か拍子抜けのした氣味で、茫然とその後姿を見送つてゐた。

(三三) 猜疑の眼 (三)

冬子が歸つて了つた後で、緒方は池田に向つて、這んな事を曰つた。

『オイ池田！、君は怪しい、ぞ獨身の君が、舊知の美人を引入れて、喃喃痴語を交換するなんかは以ての外だよ。』

『申談を曰ふな、池田正也はまだ家庭に情緒を引き入れて、痴態を盡すほど墮落してはゐないよ。』

『へん、あんまり的にもならんぞ、然しあの女、頗る美人になつたなあ、三年前阿

蘇の山の上で見た田舎娘とは大變な相違だ、最もあの時分から、考へて見ると目鼻立は揃つてゐたが、彼んなに美しくならうとは思はなかつたよ、實は此間見た時から、然う思つてゐたが、全く美しいな。

「酷く褒めるね、然し彼れで却々人格も高潔だし、性根も確乎してゐるんだから先刻のやうな彼んな不躰な事を曰つてくれると困るよ、俺は冷々したせ、阿蘇山上の茶店の娘の氣でゐたら大違ひだ。」

「フーン、俺はアレ以來一向氣にもしてゐなかつたが、君は却々委しいね、あれから屢々逢つてゐるのかい。」

緒方は何氣ない調子で話しながら、その間から二人の關係を手繰出さうと、そろ／＼その目的に近づいて来る。

「ウン、いや、なに、彼れから今日が初めてだよ。」

と、曰つたけれども、正也は此方が不用意でゐただけ、その返答は頗る曖昧であ

る、緒方は得たりとばかり。

「オイ、嘘をいふな、君のいふことは頗る曖昧だぞ、モウ四五遍は逢つてゐるんだらう、隠すなよ、可いか、茶店の娘といふと卑しく聞へるが、肥後西郷とも曰はれた金田先生の令嬢と名乗れば堂々たるものだ、決して不似合の縁ではない、何んなら俺が媒酌しても可いぞアハ、ハ、ハ。」

「オイ、そんな不謹慎なことを言つてくれるな、實際あの日以來、今日が初めてだ、俺はその金田先生の遺子といふ方面ばかり見てゐるから、冬子さんを尊敬するんだよ、什麼して却々彼れで議論でもして見給へ、確乎した根性を有つてゐるんだぜ。」

正也はツイ思ふ心の穂に出でる、兎もすれば緒方に悟られるやうな語氣を洩らすのであつた、さらぬだに、鋭い猜疑の眼を働かしてゐる緒方は正也の穂に出づる詞の端々を玩味して、自分の想像が決して想像ばかりではない、必ず事實に觸れてゐ

たに違ひないと思つた、正也や冬子に取つて、緒方に這んな考察を與へることは頗る不利である、けれども、正也は緒方が正也に一種の敵味を有つてゐることを知らないから、極めて無邪氣に、極めて開放的に、たゞ冬子と約束した事柄だけを秘密に附するだけで、その外の事まで、親友の彼に隠すといふ意志は無つた。

(三三) 猜疑の眼 (四)

緒方の口から冬子は何をしてゐるか、唯無意味に財源もなく、ブラ／＼と遊んで生活してゐられる理由はあるまいと突ツ込まれて、心に秘密のある正也は道に慥とした。

『さア、僕だつて、其處まで立ち入つて委しく聞きはしないから、知る筈はないが彼れでも金田先生の遺産があるから、相當な保護を加へる人はあらと思ふよ、それ

に目下の處では、先生の行方を捜すのに殆んど血眼の體だからね……』

『ブ、ン、然うかな、併し僕の見るところでは、父の行方を捜索する一件に託して、切々と君を訪問するらしいね、然うするらしいね、然うすると、正しく情意投合だ、愈以て怪しからん。』

『イヤ、そんなことは斷じてないよ、單に昔馴染の交情を温めるのと、實際において、我々の先輩たる金田先生の行方を捜すその相手になつて、ゐるのに過ぎないのだ、その外に何んの意味もないさ。』

『然うかね、君がそれほごにいふのだから、無論何んの意味もあるまいさ、けれどもだぬ、唯金田先生の行方を訪ねる相談に来るといふのなら、君の處ばかりぢやアない、一度位僕の處へも來さうなものぢやアないか、それが初めから君の處一點張りだ、什麼だい、疑はざらんと欲するも得ずだよ、アツハツハツハ。』

緒方の此詞には道の正也も慥として驚いた、成るほど、自分は無頓着で、一向そ

の邊のことに気が附かなかつたが、然う曰はれて見ると、確にそれに相違ない自分には緒方に包んでゐる秘密があるのだ、冬子が緒方を措いて自分を初めに訪ねた理由は明瞭である、けれどもそれは緒方に明されない秘密だ、それから二度目の會合で、不思議な縁が基となつて啜血の盟としてゐるのだ、そんなに混み入つた事情のあるのを、無難作に胡麻化さうとしたのは自分の誤りである之は假令親友の緒方も、自分達の目的の遂行をなすまでは、充分の注意をしなければならぬ、同時に緒方に對しても警戒を加へる必要があると、無邪氣な正也も、追に戀の前には開放的態度を許さず、成るべく詞を他に轉ずるやうに努めたのであつた。

「ナアニ、それは君の邪推だ、そんな馬鹿なことがあるもんか、大丈夫だよ、安心し玉へ。」

「イヤ、安心するもせんも、そんなことは僕に没交渉なんだから關やアせんがね、兎角美人といふものは問題の種だ、アツハツハツハ。」

「然う解釋すれば然うも見られやうが、虚心で善意に見れば何でもないさ。」

正也はかう曰つたけれども、それは自分ながら苦しい返事だと思つた。

「アハ、ちやア假りに僕が冬子さんにラブしたとして、之から結婚を申込みかね、何等愛情の問題に疚しい所がない君とすれば、無論幹旋の勞は取つてくれるだらうなア、如何だ、池田……。」

正也は緒方の皮肉な切り込みやうに身を慄はして驚いた。

「サア……。」

と、曰つたきり、返す詞も出さず、切りに考へ込んでゐる、彼は終始守勢となつて然も頗る旗色が悪く、陣形大に亂れた。

「アハ、……、什麼だ、その勇氣はあるまい、ないとする、君は冬子さんに對して、重大な注意人物だぞ……。」

「……………」

正也はまだ無言である。

『オイ什麼だ、返事は……。』

『僕は大に斡旋するが、果して先方が應ずるか、什麼だか……。』

『應ずると應せざるとは別問題さ、僕は唯君の態度を聞くんだよ。』

『それならば、大に斡旋する！』
と、騎虎の勢ひ、思ひ切つてかう曰ふたけれども、正也の聲には少しも力がなかつた。

(二四) 無名の豪傑 (一)

『ウム、ぢやア君が池田の御子息だね、此間冬子さんから話は聞いてゐましたが金田の事で、いろ／＼と御心配下さるさうで、俺からも厚う御禮を申しますぢや。』

加藤大佐は少しく霜を交へた、その關羽式の髭を撫で、莞爾々々しながら斯う言つた。

デツブリと肥つた重々しい、頗る威嚴のある堂々たる風采、五十恰好の、却々豫備役に埋つてゐるほど、無能の軍人とも思へぬ。

正也は態と冬子を連れず、たゞ一人で大佐を下澁谷の閑居に訪づれたのであつたかねて想像してゐた人格とは全で正反對の、頗る威嚴ある態度に先づ威壓されて、正也は何んもなく心強さを感じたのであつた。

『イヤ飛んでもないことで、貴下こそいろ／＼と御盡力下さいまして、冬子さんは申すに及ばず、初めて關係のあることを知つた私輩も、貴下あるがために、大に力強く感じてゐるのでございます。』

『アハ、、、然う仰有られると、急に責任が重くなりますぢや、何しろモウ世の中のお公の舞臺から追ッ拂はれた世捨人ぢやで、閑はあつても、力がなから困りま

すぢや。』

大佐は又しても頸髻を撫で、述懐めいたことをいふ。

『然し、貴下などはまだ之から大に社會に雄飛すべき材ではございませんか、世を捨るには少し早過ぎます。』

『アツハツハツハ、サーベルで育つた人間ぢやで、隠居役を仰附けて了つては、河童が尻ご玉を抜かれたも同様ぢや、外に使ふ處はなし、去らばと曰つて、軍政、軍略のことに口でも出せだ、長州陸軍の手で、フン縛られるかも知れんぢや、まあ、觸らぬ神に崇りなし、恩給生涯が一番無事ぢや。』

何氣なくはいふが、大佐の談話には滿腔の不平が漲つてゐる、什麼やら此人も長闊に反抗して豫備に割り込まされた、非長闊派の軍人であるらしい。

正也は大佐の口吻で、略そんな様子と察したのであつた。

『では、貴下も長闊の犠牲におなりなすた一人で……。』

『さア、どんな事ぢやらうか、然し不平黨の一人には違ひないですな、ア、、、池田君、俺のこと事なぞまア什麼でも可矣、それよりか、金田先生の事につて俺は少し疑問があるのぢやが……。』

大佐は巧に話頭を轉じて、正也の鋒先を避けつゝ、金田先生の上に及んだ。

『疑問と仰有いますと……生死を疑ふのでございますか。』

正也は自分の心にそんな考を懐いてゐるだけ、大佐が疑問と言つた詞に不安の思ひを懐いて、斯う聞くのであつた。

大佐は手を揮つて、その詞を遮り。

『イヤそんなことぢやアない、つまり金田先生ではないかと思はれる、疑問の人があるのぢや。』

『エーッ、先生らしい疑問の人があると、ソ、それは、ド、何處にゐるのですか、ナ、何をしてゐるのでございますか。』

正也は胸を躍らして膝を進めた。

(二五) 無名の豪傑 (二)

「イヤ、それほど確信のあることではないぢや、之は冬子さんなどに話せる事柄ではない、要するに女などに聞かすべき事でないのぢや、幸ひ君が俺に意見を求められるで、参考のためにお話を置いて置かうと思ふのぢや。」

大佐は頗る冷やかに、焦り立つ正也を制して、息つきの茶を啜りつゝ。

「それを話す前に、金田先生と俺の關係を言ふて置きたい、先生は我が熊本の書生に取つて慈愛ある恩人だ、俺なども先生に養はれて士官學校を卒業したのぢやが、君のお父さん、即ち池田芳則さんなどは、俺達とは違つて、寧ろ同輩ぢやつた、先生の片腕ぢやつたよ、先生は疾うから滿洲に目を着けてゐられたらしい、日露開戦

前に滿洲に着眼してゐられたのぢやから、先生は活眼達識の士ぢや、ごんな目的を有つてゐられたかは、俺等のやうな當時の書生には判らんが、君のお父さんはよく知つてゐられたらしい、それで此間冬子さんが見て話には、君の宅からお父さんの日記が出たさうぢやな。」

「冬子さんの話を聞いて、早速家捜しをしましたら、あんなものが出て來ましたので、ソノ記録に依ると、私は正しく先生は、滿洲に行かれたものと想像してゐるのでございますが……。」

「然うぢや、彼を見たので、俺はその胸に秘してゐた疑問の人が、愈先生らしく直覺するのぢや、切々ではあるが、アノ日記が君のお父さんの手記に成つたものであるだけ、尊い證據であると、俺は思ひますのぢや、それで愈疑を深くしてゐるのぢやがね。」

「と、仰有るその疑問の人は、何處にゐるのでございますか。」

『満洲ぢや、満洲の山奥にあるのぢや、先生が満洲に着眼してゐたといひ、君のお父さんの手記といひ、彼是を綜合すると、什麼しても然うではないかと疑はれるのぢや、龐氣な疑問を以て、冬子さんの心を唆すのはよくないことぢやから、アノ娘には曰なかつたが、君にだけ話して置かう、何等かの方法で之を確むることが、一番近路ぢやと思ふ、それは外でもない、つまり満洲の或僻遠な地に、無名の豪傑があるのぢや。』

大佐は斯う曰つて、漸くその疑問の人の身の上を語らうとする、正也の好奇心は無名の豪傑といふ大佐の一言に、モウ引き付けられて了つた。

『之は此頃満洲に駐屯してゐて、近く交代して内地へ歸つて来た、元俺の部下にゐた若い大尉が、何氣ない土産話ぢやが全然三國誌か水滸傳でも讀むやうな話ぢや。』
モウ本文に這入るかと、耳を聳て、聞いてゐる正也は、又しても大佐の語頭が註解にのみ馳せて行くので、頗るもどかしくなつて。

『大佐！、さう焦さないで、早くその無名の豪傑の名をお聞かせ下さいませんか。』
『アハ、、焦らすのではございません、順序を話して置かんと、判りませんからなア、本文に入るに先立つて、その噂の出處、註解を加へて置きますのぢや、アツハツハツハ……。』
大佐は快活に高く笑つた。

(二六) 無名の豪傑 (三)

『其大尉が齎して来た情報に依ると、鐵嶺の北東、然うぢやな、殊に依るとモウ蒙古に這入つてゐるかも知れんぢや、約四十里ほどの山中、つまり支那政府の統治權の及ばない山奥じや、無論日本の軍隊など、一步も足を入れたことのない土地に、馬賊の隊長があるのぢや、それが今いふ無名の豪傑なんぢや。』

『ナニ馬賊の隊長？……無名の豪傑？……而してそれが疑問の人なんでしょうか、金田先生らしい人なんでしょうか。』

『左様でござす、所がそれが普通の馬賊とは違ふのじや、さア、何んと言つたら適當ぢやらうか、義賊、といふのも變だし、まづ支那流の豪傑、一種の俠客ぢやな、噂があまりに臚氣なので、筋を立て、いふことは出来んが、その隊長が日本人といふので、滿洲の駐屯軍中に非常の評判になつてゐるにぢや、年頃はまづ六十格好ださうで、何んでも二三百年に近い部下があつて、それを各所に配置して隠然一小王國を形作つてゐるといふことぢや。』

『ソ、それが什麼して、金田先生に、ニ、似てゐるのでござりますか。』

『金田先生は東洋流の豪傑ぢやつた、俠氣九分の人ぢやつた、這んなことをやりかねない人でござした、年頃も今生きてゐられたら六十格好ぢや、けれど、たゞそれだけでは金田先生ぢやないかといふ疑問は起らんでわす、それには理由がありま

すじや、元來此無名の豪傑を發見したのは、鐵嶺附近にゐる日本商人ぢやといふことで、何か思ひ立つことがあつて、蒙古に這入らうと、遼河を越えて北滿洲の山中を横斷して行くと、什麼道に迷つたものか、人家も部落もない淋しい山中に這入つたのぢや、すると四五人の馬賊らしい支那人が現れて、突然その商人を唆つて行つたのじや、而して十里も奥の深い々々山中に連れ込んで、隊長の前に引つ立てたのじや、すると隊長が出て来て、その商人にいろ／＼日本の事情を尋ねたさうぢや支那語の間にチヨイ／＼日本語を交せて話す様子、その日本語に九州訛りがあつてな、日本内地の事情もよく知つてゐるらしいので、商人が、

『大人日本人』つまり貴下は日本人でせうと曰つて聞いたさうぢや。』

『ウム、九州訛りがあつたのですな、而して日本人だらうと言つたら、何と答へたのです。』

『アツハハツハ、大分油が乗つて來たやうぢやな、之からが肝腎な處でござすぞ、

其隊長は笑つて商人の顔を見ながら、然うではないと言つたさうじや。』
 『フ、ン、否認したんですな……。』
 『けれども商人は日本人に違ひないく、と言つて迫つたのじやが、然うではないと言ひ切つて、我々は形は馬賊じやが、漫りに人に危害を加へたり、掠奪したりするやうじ無法手段は取らない、殊に日本人に對しては大に厚意を有つてゐる、保護を加へるとも、害はしない、日露戦争にも、我々は花大人を助けて、日本軍に利益を興へたほじやから、安心してお歸んなさい、と曰ふてな、何か記念品まで呉れて、部下のものに保護させて、蒙古へ這入る道まで教へて、丁重に十里ばかり送つてくれたさうじや。』

(二七) 無名の豪傑 (四)

『それから其商人が鐵嶺に歸つて、駐屯軍の懇意な將校に、その話をしたのが噂の初まりで、駐屯軍の大評判になつたのでござす、駐屯軍でもそれは必ず日本人に違ひない、何か目的があつて隠れてゐるのか、さもなくば國事犯でも犯したのか、本國を逃げて來たのじやらうと、噂が噂を生んで、駐屯軍の少壯士官などが兵士を連れて、二三度訪問したけれども、什麼しても日本人ではないと言ひ切つてゐるさうじや、けれども駐屯軍の間では、勝手に日本人にして丁つて、隊長が好意を寄せてゐるといふのじや、什麼でござす、池田さん、俺はたゞ理由のない直覺でいふのぢやが、ここに依つたらと思ふが、君は什麼思ひますじや。』

加藤大佐の此奇なる物語は、よしそれが金田先生でないにしても、興味のある事實である、若しそれを日本人としたなら、確に何か目的を抱く志士に違ひない、正也は面白い傳奇小説でも讀むやうな興味を以て、大佐の物語りを聞き、且つその内容を玩味して見た。

兎に角面白のお話でございました、年齢の符合といひ、九州訛のある日本語といひ、その商人に物語つた詞の端々といひ、之を疑問の人としたのは理由があります或は先生であるかも知れませんな。』

正也もこの物語には太く望みを囁いたらしい、大佐は尙も詞を續けて。

その花大人といふのは、日露戦役に特別任務を帯びて、馬賊軍を利用した花田中佐といふ、今は大佐になつて豫備役にゐる軍人じや、その花大人を助けたといふ位じやから、フン、然うじや、俺が花田から聞いてゐる處でも、當時日本人らしい首領に率ゐられてゐる、一隊の馬賊があつて、規律厳正に、命令よく行はれ、最も我軍に有利な行動をしてくれた、といふことを聞いてゐましたじや、かたゞ以て先生が満洲に渡つたとすれば、さし當り此の隊長などは注意すべき人物じやと思ふがな。』

『如何にも仰せの通りです、確に探して見る價值がありますな、それで、その隊長

の名は何といふのですか、又場所はその邊で、地名は何といふ處です。』

『さアそれを聞き洩らしてゐるので残念ぢや、大尉の話はで鄭氏とか郭氏とツ曰つてゐるのじやが……地名も殆んど人境を絶した處ぢやで、名も何もないが、駐屯軍では、范家屯北方高地と曰つてゐるさうじや。』

『ウム、その名が金氏とでもいふのでしたら、大いに見込がありますな、何れにしても、一度冬子さんと相談して、渡航して見る必要がございますな。』

『イヤ、池田さん、此事はまづ暫時の間、冬子さんには秘密にして置く方が可矣ぢや、本人にいへば、必ずアノ氣性で焦せるに相違ない、それから渡満するといふ事もまだその時機ではござせん、何しろ單に噂に過ぎないことじや、も少し具體的に確のんことにお手が出せん、その方法は俺の手にも相當にある、モウ少し時機を待つがよい、たゞ君たちに参考のため話して置くのぢやから……。』

大佐は逸る正也を押し止めて、何事か更に秘密の談話をつげ、正也に方法を授け

るのであつた、正也もその意を諒して大佐の指圖するやうに任せた。

九六

(二八) 結婚の拒絶 (一)

金田冬子と油田正也との交情は、日一日と知人關係を離れて、全く戀人同士の語らひとなつて行く、二人の間は異性の愛が段々深く根を張つて行くに従つて、金田先生の消息を知る方法と準備とがいろいろに研究されて、着々進捗して行くらしい進捗するに従つて益々秘密を嚴守する必要を生じ、二人の關係を人に知らしめまいと勉めるやうになつて來た。

冬子は東京に出て來てからまだ間もないこととて、知る人も少く、之が有名な熊本の名士、金田五郎の遺兒と知る人もないけれども、緒方だけはそれを知つてゐる知つてゐると同時に、二人の間の交際について疑問を懷き、或る程度までその疑問

が事實に接近してゐるだけ、それだけ緒方が油田の親友であるとしても、二人は之を警戒しなければならぬ、といふことを、正也を過ぐる日の緒方の詞で痛切に感じてゐる。

その後冬子に逢つた時、正也は彼の際の事情を詳しく話した、冬子も緒方は注意すべき人物であるといふことを認めてゐるので、二人は互に警戒を加へ、その後は冬子も絶対に正也方へ出入しない約束をなし、必要があつて會合する時は冬子の隠家か、さもなければ待合か料理屋のやうな、ワザと人の出入の多い處で、痴男痴女が密會するやうな風をしてゐた。

そんなことは知らぬ緒方時男は、かの夜偶然にも正也の宅を訪問して、冬子に面會し、それと同時にいろいろ疑はしい事實を發見して、愈正也に對する反感を強くすると共に、金田先生の遺子である冬子と正也との交情には、其處に必ず何等かの、深い意味があるに相違ないと解釋し、之れまでよりも以上、猜疑の眼を

光らし、瓜を磨いて、窃に二人の行動に注目してゐたのであつた。
 時男も正也と同じくまだ無妻である、イヤ大學を出ると間もなく、郷里から妻を
 迎へたのだが、仔細あつて同棲一年ほどで離縁して了つた、その離縁についても何
 か深い理由があつたらしく、それ以來まだ良縁がないので、止むを得ず獨身でゐる
 ので、正也が妻を娶らぬのは自ら意味を異にしてゐる。
 時男は一たび冬子を見て以來、實はその美に憧れ、その色に囚はれて、強烈な戀
 に落ちたのであつた、負惜しみの強い彼は口にくそ出して曰ね、心には餘ほど煩悶
 を重ねてゐるらしい、最も當初は冬子と正也との交情に、或る重要な意味が含まれ
 てゐると思はず、恐らく戀の問題だらうと想像してゐたので、冬子が正也に愛を
 注いでゐる限り、如何に自分が冬子を思つた處で、到底高峯の花に過ぎないと考へ
 てゐたが、その後數々正也に逢つて、それを追究すると、正也は斷じて不潔な關係
 は勿論冬子を思つたこともないと斷言する、さうまでいふのなら、寧ろ冬子を妻に

迎へやうと、茲に初めて決心したのであつた。

緒方がいよく然う決心するについては、その間に種々の意味が含まれてゐた、
 自分が冬子を娶つて、正也の手から奪うといふことは、或る意味において近來評判
 のよい、得意の時代にある彼をして、少くとも失望させるものだと考へた。且つ冬
 子が金田先生の遺兒であるといふことが、何か自分の社會的地位に、新しい利益を
 得るやうに考へたからで、決して熱烈の情緒でもなければ、眞率の愛でもない、謂
 はば冬子を一種の玩弄物扱ひ政略的扱ひにしたものであつた。

(二九) 結婚の拒絶 (一)

『君と冬子さんの間に、何等戀とか愛とかいふもの、發生さへないならば、僕が
 これほど懇望するのだから、一つ僕の意志を先方に傳へて、斡旋の勞を取つてくれ

玉へ、斯ういふ時によりて、日頃の交情が用をなすといふものだ、オイ池田君！、頼むよ。」

銀行からの歸り途に、緒方は池田を訪れて無理に之を誘ひ出し、京橋邊の或る料埋屋に這入つて、互に酒を酌み交しながら、緒方は自分の意志を池田に表白し、冬子を妻に貰ひ受けたいから、その媒介をしてくれと頼むのであつた。

「此間は全く君が冗談を曰つてゐることだと思つてゐたから、斡旋するとは曰つたが、實際眞面目に、本氣に、然う出られると、僕は實に困るんだ。冬子さんは、今の處、兎ても他に嫁くやうな意志はないらしいし、さらばと曰つて、僕が君の意志を取り次がなければ、君からは痛くない腹を探られるし、實に困つたよ。」池田に全く當惑した、斯う本氣に緒方が出て來やうとは夢にも思はなかつた、冬子と自分とは今血を啜つて堅く約束してゐるのである、到底他に嫁入るやうな意思のないことは明かである、よしあつたにした所で、今自分の手から冬子を離すとい

ふことは、何んだか掌の中の玉を奪られるやうに思ふ、自分と冬子との間には、互にそれと口にくそ出して言はぬ、相愛する心は確にあるのだ、謂はば戀人だ、その戀人を什麼して自分の手から離されやう、ましてそれを自分の口から緒方の妻になつて下さいと什麼して曰へやう、よしや曰つた所で、冬子がオインレと行くといふ氣遣いのないことも亦明瞭である、行くまい、行かせまいとする冬子なり自分の立場としては、事實緒方により加減な返事をする譯には行かぬ、さらばと曰つて、今池田には冬子は自分の戀人であるといひ切るだけの勇氣は勿論ない、否今暫らくは政畧上、二人の間に、愛情のあることなど嘘にも出したくない、それを公言すれば愈緒方に疑の眼を深くさせて、延いて二人の間の秘密を嗅ぎ附けられぬとも限らぬ、池田の今の立場は第三者でなくして實は當事者の立場であるのだ、緒方は正也がそんな複雑した煩悶に囚はれてゐるとは夢にも思はない、最も多少正也に愛がないとも限らないと思つてゐるが、それを遮つて冬子を自分の手に奪うといふこと

は愉快だと考へてゐる。

「何もそんなに困ることはないぢやアないか、君は僕の意志を先方へ取り次で、その返事を聞いてくれ、ばそれで可矣のだ、而して出来る限り……此縁談の成立に励めてくれ、ば可矣のぢやアないか、君がベストを盡してくれて、それで成立しない」とあれば什麼も仕方がない、それまでの縁と諦めるさ。」

「それが僕は實に辛いのだよ、冬子さんは決して結婚を肯んじまいと思はれる理由があるのだ、だから僕が引受けて、君の意志を先方へ通ずるところで、拒絶されるに決つてゐる、拒絶されるものといふ確たる見込がついてゐるのに、それをいひ出して、成立しなければ君も面目なからうし、僕も使命を恥しめて、君に面目ない思ひさせなければならぬのだ、だから僕は困るといふのだよ、其處を諒としてくれなければ困る、そんなことで親友の間に垣を作りたくはないからね。」

正也はシミ／＼と其理由を説明するのであつた。

(三〇) 結婚の拒絶 (三)

緒方は、正也が諄々として説明すればするほど、却つて不快な顔をして、グツと膝を乗り出し、

君のいふ所は、什麼しても僕にはわからない、第一何故に結婚を肯んじないのか、その肯んじないといふ理由も曰はないで、君が直に先方の意志を説明するのは、僕には什麼しても合點が行かない、一體その肯んじないといふ理由は何だ、まづ其説明から聞かう。」

緒方は唯ならぬ権幕で、威丈高になつた、正也は愈出て、愈窮した、此理由を説明することは什麼しても出来ないのである。

「さう君のやうに激して了つては困る、その理由といふのは……ナアニ、理由とい

ふと大袈裟だが、實はその、わね、此間も曰つた通り、冬子さんは金田先生を探すのに夢中になつてゐるんだ、だから父の生死が判明するまでは、人の妻にならないと曰つてゐたからさ……』

正也は苦し紛れに口から出任せのことをいつて、その場を濁さうとする。

『オイ、馬鹿にするな、肯じない理由といふから、深い仔細でもあらうと思つたら何んだ、そんな薄弱な理由か、そんなところなら理由ある主張を以て、本人の心を破ることが出来るじやアないか……ウ……ム、君は親友の情誼を没して、初めからこのことを打ち壊さうとする意志なんだね、親友のためにベストを盡して、成立に盡力してやらうといふ誠意がないんだね、察する所、肯じない理由といふのは、そんな薄弱なことぢやアあるまい、何か他にモット重大な意味が、君と冬子さんの間に結ばれてゐるんだらう、それだから君は我輩を拒むんだ、可し、君がさういふ了簡なら、我輩もそのつもりで、今後に對する友情を冷やかにするから、そのつも

りであてくれ玉へ。』

緒方の眼は異様に光つて、グツと正也を睨め附ける、正也は頗る狼狽して。

『ト、飛んでもない、ソ、そんな重大な意味なんか毛頭ありやアしないんだ、ヨ、宜しい、君がそれほどいふのなら、兎も角も君の意志を先方に傳へて、成るべく成立するやうに盡力するから、然う怒つてくれるなよ、僕は決して君に對して、他意ある譯ではないのだから、僕の直覺が、兎も冬子さんは承知しないやうに思ふので、然ういつたまでのことだ、怒るな、怒るな……僕は困るよ。』

『それにした處で、君が消極的の意見で、交渉をされたんぢア、何にもならない！』

『イヤ、充分積極的にやるよ、但し、如何に僕が積極的にやつたにしろ、僕の豫想通り拒絶されたら、什麼する。』

『君が積極的に交渉してくれて、冬子さんの所謂背じないといふ理由を説破して、』

それで尙且つ拒むといふのなら、什麼も仕方がない、たゞ望む處は、君が積極的によつてくれたといふ誠意だけは、僕に判るやうにして貰ひたいのだ、夫は自ら君の腹にあらうと思ふから、僕は今改めて曰ないことにする。」

「宜しい、ぢやア早速交渉して見やう、すぐその返事を齎すから……。」

「ウム、頼んだぞ、然し冬子、んは一體何處にゐるんだ。」

緒方は又しても正也に苦しい問を起した、然し此場合に正也は、冬子の居所を秘することは出来ないで明白地に、牛込の甘騎町だと答へた。

(三二) 結婚の拒絶 (四)

「什麼も實に弱りました、僕も今日まで法律上の難件には屢出合つて、それとく解決を附けて來ましたが、緒方の今度の頼みばかりは、實に閉口しました、緒方が

ら見れば、實際僕は第三者の立場なのですからな、それがその實當事者なのでせう、貴女は交渉したつて、貴女が承諾される理由のないことは、能く判つてゐるのですもの、その理由は什麼しても曰へませんし、秘密を抱く身は、かういふ所で弱點を押へられるのだと、泌々思ひましたよ。」

池田正也は、緒方の皮肉な請求を却ける事が出来ない破目に陥つて、止むなく交渉を受け入れたもの、素より正面から冬子に交渉すべき事柄ではないから、何と曰つて断つたら宜からうかと、冬子の意見を聞くべく、次の日、二十騎町に冬子を訪れて、その相談をしたのであつた。

冬子の宅は二十騎町の閑静な、門構へではあるが、三間ほどの引き締つた家で例の忠實な假の親たる甚兵衛と、ただ二人ぎりて暮してゐる、全然下家で、寧ろ妾宅ではないかと怪しまれるやうな住居である、丁度此日甚兵衛は留守であつた。

冬子は黙つて一通り、正也のいふ所を聞き終つた後。

「真箇に嫌な人でございますわね、何も背んじない理由がないにしたつて、妾、緒方さんのやうな人の妻になるのは絶対に否ですわ、然し困つたことは困りましたわね、何んとか其處に理由を附けなくちやア、貴下の立場がございませぬわね……。」

冬子「はかう言つて、一寸考へて見る様子であつたが、意味あり氣に微笑んで、

「池田さん、假りに妾と貴下との間に這んな盟約がない體だとして、何時でも良縁があつたら、嫁に行くことの出来る身だとして、この場合妾が緒方さんの處へ嫁くと言つたら、貴下は何して？ 賛成して下さいますか……。」

目的を外れた途方もない問を冬子が起したので、正也は面喰らつて即答も出來ず、疑と冬子の面を打ち成つてゐた、冬子は意味ありげな、然も熱のある感情の昂つた聲で。

「エ、池田さん、貴下什麼遊ばして……。」と媚びるやうな態度で、優しく聞き直

すのであつた。

正也はその意味を了解した、と、同時にその胸中は早鐘を打つやうな心臓の鼓動を覺ゆる、而して初心らしく、顔を赧めて、口さへ吃りつゝ。

「若し、然うなつたら、オ、恐らく僕は失望して死ぬでせう……。」

と曰つた、冬子はさも我意を得たといはぬばかりに、いそぐした態度で。

「然う、屹度然うですわね、ぢやア貴下妾を愛して下さるのね。」

冬子は顔を赧めて差し俯向く。

「僕は冬子さんを愛します、心から愛を傾けてゐるのですが、我々は戀よりも愛よりも今の處ではモット重大な使命を帯てゐるので、その使命を果す爲に、暫らく燃ゆる情を抑へなければなりません。」

「然う、然ういふ風に二人の愛が明白に表明されたなら、此後は愛人としてお交際が出来ますわね、いよく父の在家なり生死なりが判明した曉には、貴下妾を妻

にして下すつて……。』

『金田先生が生きてゐられて而して、許して下すつて、貴女もまた僕のやうなものを愛すると仰有つて下さるなら、屹度貴女を妻に迎へます。』

『ア、有難うございます……。』

冬子は燃ゆる情を抑へ得ぬやうに、嬉し泣きに泣き倒れた。

(三三) 結婚の拒絶 (五)

『肝腎な相談が横道に外れて了ひましたね、冬子さん、緒方の方を什麼したものでせうなア。』

正也は漸く我に歸つて冬子を促した、冬子はヤツと面を上げて、

『決して横道へ外れてはゐません、二人の仲に隠れてゐる愛の結合を、お互に表白

して堅く約束して置くことは、此際必要なことだと、妾は思ひましたから、緒方さんのことを御相談する前に、我々の愛を明白にして、目的を遂げる上に大事なく、樂みと、希望を作つて置かうと思つたのでございます、それで貴下が妾を愛して、將來妻にすると仰有つて下さるなら、モウ緒方さんの方の問題は、解決してゐるではございませんか。』

『ナニ、二人の愛が表明されたら、緒方の問題は解決されたど、ソ、それは什麼いふ理由です。』

『什麼いふ譯つて、池田さん、貴下は冬子は自分の妻にする女だと仰有ればよいのではございませんか、冬子はモウ婚約の済んだ主ある女です、主ある女に結婚は申し込まれない譯ですわ。』

『ウム、然うですか、然しそれは不可はせん、之は斯ういふ場合に陥らない以前なら、或は僕の口から然う曰つて断ることも出来たでせうが、何しろ緒方には僕と貴

女との間に愛情などは微塵もない、ただ舊知の交際だと断言してゐるのですもの、それを今になつて、實は僕と冬子さんは婚約だから……と、そんな虫のいいことは曰れませんか。』

『そりやア、貴下のお口からは曰れますまいが、妾の口から曰へば宜いちやアございませぬか。』

『誰の口からでも、そんな事は今の場合絶対に曰へません、假りに曰へるとしてもそれでなくてさへ、緒方は我々二人の間に、何か重大な意味を含んでゐる連絡があるんだらうと、疑つてゐる時ですもの、二人の間に、戀があるなどといふ事は、金田先生の消息が判るまで政策上から曰つても、断じて曰へません、緒方に對しては罪惡ですが、嘘も方便で、全然二人の愛は秘中の秘として置かなければなりませんだから僕は實に弱るのですよ。』

『戀を秘密にするなんて、そんなことは出来ませんわ、そんなことを強ゆるのは殘

酷です……。』

『殘酷でも何んでも然うしなければなりません、金田先生の所在を確めるまでは、戀も愛も犠牲に供して了はなければなりません。』

正也は嚴然としてかういひ放つた、その威嚴のある態度、その頼母しい詞、これでこそ自分が見込んだ男だけであると、冬子は欣々として、初めて本然の冬子に歸つたらしく。

『然うです、然うでしたわね、妾は愛よりも戀よりも、モツと重大な目的を有つてゐるものでございしたわね、戀も愛もすべて、その目的を果した上のごとです、ではかうしませう、妾が緒方さんにお目にかゝつて、キツパリと断ります、然うすれば宜いでせう、ですから貴下は、冬子に交渉したら、兎も角緒方さんにお目にかゝつた上で、勘考すると言つてゐたと仰有つて下さい然うすれば屹度茲へ來ませうから、來たら貴下に累の及ばないやうに、甘く断りますから……。』

相誰は此邊で漸く決定したらしい。

(三三) 結婚の拒絶 (六)

正也と冬子との相談は漸く決定した、正也も、他に適當な口實を見出す事が出来なかつたので、冬子の發意に従ひ、その足ですぐ緒方の許を訪づれて、冬子の曰つたやうな意味で返事をした。

緒方は、案外正也の返事が好望なのを寧ろ不思議に感じた、それでも本人が直接自分に逢はうといふだけ、その間に正也の努力が深かつたことを感じ、且つ二人の間に、愛の交換がある物と疑つた事を打ち消した、此上は自分の説きやう一つで、冬子を自分の妻にすることが出来る、須叟の後非常なる侮辱を蒙らうとも豫期せず多勢の希望を抱いて、翌日二十騎町に冬子を訪れた。

すぐに客室に案内されて、冬子が出て来る、時候の挨拶やら、住宅の話やら、金田の噂などに時を移して、容易に本題に這入らない、冬子は少し焦れ氣味で、自分の方から當面の問題を切り出した。

「池田さんから、段々御親切な詞を頂きまして、不束な身を、誠に嬉しく存じて居ります。」

「イヤア、什麼も實に、甚だ不躰なことを申し出しまして……。」

緒方は此間、池田の宅で逢つた時とは全く態度を異にして、馴々しい中に、頗る慇懃を極めたことを云ふ。

「態々お入來を願まして、眞箇に恐れ入ります、アノ、實は池田さんに御返事を申し上げても宜かつたのでございますが、いろ／＼事情がございますので、知らない仲ではございませぬし、直接にお目にかゝつてお話し上げた方が、誤解がないと存じますね……。」

什麼やら形勢は豫期に反して、拒絶の意味らしく聞ゆるので、緒方はサツと顔の色を變へた。

「ハア、で、諾否は只今窺はれるのでございますか……。」

「ハイ、申し上げます、つまりお断り申したので……。」

「何んです、拒絶すると仰有るのですか不承知といふのですか、夫ならば態々御招きを受なくとも、仲人の池田に仰有つて下されば其、でよかつたのでしたな。」

緒方は氣色ばんだ、彼は、詞を竭して冬子を説服し様と努むる積であつたが、頭から拒絶されたので、非常な侮辱を感じると共に、忽ち不快の感と、彼に特有の富豪根性、即ち倨傲心がムラ／＼と湧て、非常な反感を誘起したのであつた。

「ですけれども、承はると、強く池田さんが御迷惑なさるやうに伺つて居りましたので、その理由をよくお話し申し上げやうと思ひまして、たゞ御友達といふ譯で、お入來を願つたのでございますよ。」

かういふ風になると、冬子は頗る強くなる特質を有つてゐる、後は平然として済し返つてゐた、緒方は一層癡に障つて堪まらない、元を曰は高が茶店の娘、金田先生の子といつた處で氏、より育ちだ、その上池田の迷惑になるといふ一言が、太く彼を刺戟した。

「ウム、では何んですか、池田は自分で迷惑になると曰つたのですな、自分で返事をしかねると曰つたのですか、シ、失敬な奴だ。」

緒方は、又も悪意の解釋と、猜忌の眼とで、冬子の拒絶は池田と相談の上に出たものと邪推した。

(三四) 結婚の拒絶 (七)

冬子は落着き拂つて、

「オホ、、、貴下のやうに、然う何も彼も、悪意に御解釋く下つちや困りますわ
淡泊と男らしい態度でお聞きなすつて下さいよ。」

「勿論です、男らしく聴きますとも、けれども断る話なら、何も當事者を呼びつけ
て、仰有らなくつても可矣でせう、貴女は紳士を侮辱するつもりですか、イヤ、侮
辱するために、態々呼び附けたのですか。」

「ソ、それが悪意の解釋といふものです、お友達だと思へば何んでもないではござ
いませんか。」

「誰が…貴女を友達なぞと思ふものですか、僕は茶店の娘を友達にするほど、ま
だ友達に餓えてはゐないんです。」

「オホ、、、それほど卑しい女なら、結婚なぞ申込まなければ宜しうございま
すのに。」

「友達と思はないから、池田を以て申込んだのです、だから不承知なら不承知の旨

を以て、池田に答へたら可矣のだ。」

「だつて貴下、池田さんに積極的厚意の實を示せつて仰有つたと云ふぢアございま
せんか、妾、實は貴下に限らず誰に限らず、夫とすべき人は、もう定まつて居るの
でございませうから、謂は、主のある身ですもの、お断りを致すのは當然です。」

「ナニ、主がある、さうですか、ぢやア外妾ですね、然らすんば人の情婦か、飛ん
でもない所へ飛び込んだものだ。」

緒方は断られた腹立紛れに、憎まれ口を叩いて引き上げやうとする、冬子はその
氣性として、こんな侮辱の詞を甘んじて受けてゐる女ではない。

「緒方さん、一寸お待ち下さい、外妾とは何事です、人の情婦とは何事です、結婚
を拒絶された腹癒せに、言つた詞なら許して上げますが、心からそんな無禮なこと
を仰有つたのなら許しません、紳士にあるまじき卑怯なお詞ぢやございませんか。」
「アハ、、、然うですか、ぢやア外妾と情婦とは失言として取消しませう、その

代り、主と仰有る方のお名を伺ひませうか。

『そんなことを、貴下に申し上げる必要はありません、誰であらうと大きにお世話です。』

『アハ、、、大變な勢ですな、まア今日は之でお別れませう、何れこれこれも自然に判りませうからなア。』

『仰有るまでもございせん、何れは判ります、判る時機が来れば、堂々と名乗ります。』

二人とも、遂に一步も譲る所なく立ち別れた、冬子は緒方が歸つた後で、圓満に話をしやうと思つたことが、騎虎の勢で平生から嫌な男だけに、隠忍することが出来ず、喧嘩分れに終つたのを悔やんだ、之がため、池田に累を及ばしはすまいかとそれを案じたのであつた。

果して緒方は之がために、いよく池田と冬子とを疑ひ、冬子を憎むと同時に池

田に對する反感が一層強くなつて、猜忌の眼はいよく鋭く、注意はいよく烈しくなつて、もう二人の交情は、全く破裂せんとする形勢を示した、けれども、それにはまだ池田を攻める重大な理由がないので、公然敵とする所までは行かず、互に何んとなき、垣を隔つるといふ傾向を見せてゐるのであつた。

(三五) 腹癒の報復 (一)

冬子が騎虎の勢ひで、膠もなく緒方の結婚を拒絶し、且つ定まる夫がある時まで極言したので、さらぬだに正也との間を邪推してゐた緒方は、その約束した男といふのが、正也ではあるまいかと、益々疑ひを深くし、水魚の如き交はりは、一たび名聲の上の嫉妬で、緒方が反感を懐くやうになり、二たび今度の一件で、終に破裂の間際まで押し寄するに至つた。

池田は其後、緒方が全く交通を絶つたので、緒方から直接には何事も聞いてゐなかつたが、冬子から當時の顛末を聞き、意外の結果に一驚を吃したのであつた、それと共に、此問題が二人の交際に悪影響を及ぼしはしまいかと心配した、然し今となつては、何事も成行に任すより外に、方法がないと覺悟した。

で、其後は専ら、曩の日加藤大佐から聞いた無名の豪傑について、それとなく捜索を續けてゐるのであつた、然し此事は大佐から、堅く冬子への口止めがされてゐる、まだ具體的には何事も話して居らぬ、然し昨今では、餘ほど其の事實が確められて來たので、それとなく、概略の話を置いて置いても可からうと、大佐から許しを得たので、今宵は豫め冬子に通告して、楽しく夕食を共にしながら、経過を物語らうと、日が暮れてから二十騎町を訪れたのであつた。

時は二月の下旬で、北風の多い東京の街は寒かつた、冬子は待ちかねてゐたので二人はすぐ連れ立つて其處を出た、甚兵衛が門の側まで出て來た。

『寒いから風を引かねわやうにさつしねよ、而して成るべく早く歸るだア可いかな。』

と、案じながらいふ、二人顔を見合して、莞爾笑ひながら。

『老爺さん、大丈夫ですよ、安心して下さい。』

『大丈夫ですよ、僕が附いてゐますから……。』

冬子は、鼠無地の半コートに羅紗の肩掛を襟深く巻き、池田は二重廻しの頼の襟を立て、二人はすれつもつれつ、成るだけ淋しい途を辿つて、電車に乗るつもりか、肴町の方同に歩いて行つた。

甚兵衛は後を見送つて、門の戸を閉ぢて家に這入つた様子、それを見定めてか將た偶然にか、冬子の宅の隣の長側から、將校マント着けた、烏打帽子を眉深に冠つた書生體の男が現はれて、闇の行手を透かし見ながら、半町ほど二人を遣り過して置いて、見ゆ隠れに後を附て行くらしい様子である。

二人はそれとも知らず、肴町まで出て其處から電車に乗った、怪しの男は二人が車内に這入るのを見届て、發車間に飛乗りをやり、態と車掌臺の横手の方に身を隠して、それとなく車内の様子に注意する。

二人は、飯田橋と萬代橋とで乗り換へて、淺草行で雷門へ降りた、かの怪しい男もつづいて降りた、二人は相變らず肩と肩とを摺り附けて雷門から吾妻橋を渡つて枕橋の方に行き、八百膳の前に立ち止まつて、何か二言三言囁いたが、やがて打連れて其處へ入る。

怪しの男は一寸其處で躊躇つたが、やがて之もつゞいて八百膳に入る。

(三六) 腹癒の報復 (二)

『其無名の豪傑といふのが、餘程有望になつて來たんでせう、加藤大佐のお話に依

ると什麼しても金田先生に符合するのです、夫れから大佐は八方知り合の方に問合せをして下すつた結果、花大人即ち花川大佐からの有力な情報があつて、確に日本の志士の成れの果に相違ないといふ折紙がつかまりましたので、名はまだ判りませんが、加藤大佐からその土産話を持つて歸つて來て呉れた大尉に頼み、大尉から更に鐵嶺の商人に目下問合中なのです、此返事が來たら、略見込が立つだらうと思ふのです。』

八百膳の奥まつた四疊半、川に沿うた座敷で、正也と冬子とは最と樂し氣に、例の加藤大佐から聞き得た無名の豪傑の断としてゐる、而してその後大佐から各方面に問合してくれた情報をも物語つた正也は、右手に盃を取つてグソと煽りながら、『その商人から返事があつて、愈確實に見込が立つたとなつたら、是非ともその滿洲の山奥に行かなければなりません、却々女の身では容易ならぬ事業ですぞ。』

の豪傑が父であつてくれれば、宜しうございますが、それにしても何時頃返事が参るのでございませう、早く聞きたうございますわね。

『さア普通なら十日もかかりませんが、いろ／＼調べる事項もありますから、まだ半月乃至はかかりませう。』

『妾、眞箇に待ち遠しいことよ、羽があつたら其處まで飛んで行つて、人手を借りずに妾が自分で確めて來ますものを……』

『有理です、それほどに思はれるのも、決して無理ではございません、多分大佐の意見でも、私の見込でも、十中の九分まで間違ひはなからうかと思ふのですが、さて愈さうとなつた曉に、滿州へ渡るとして如何なる差し繰りをして、僕が貴女を連れて行きますが、茲に一つの難問題が横たはつてゐるので……』

正也は何かいほうとしたが、不圖氣が附いて笑ひに紛らし。

『アハ、、、万難を排して同行しますから、安心して下さい。』

と いつたけれども、冬子は早くもその詞を聞き答て。

『ま、正也さん、難問題と仰有るのは、ナ、何でございます、ド、什麼な事でございます、仰有つて下さい。』

『ナアニ、何んでもありやアしません、お話するほどの事ぢやアないんです、可矣んです、アハ、、、。』

『正也さん、貴下それはあんまり水臭いお詞ではございませんか、將來苦樂を共にしやうといふ、その末來の妻たる妾にア、あんまり他人行儀でございます、オ、仰有つて下さい、その難問題といふのを……』

冬子は眞面目になつて正也を詰つた、正也は左も當惑したやうに。

『困りますな、何もそんなに仰有るほどのことぢやアないんです、例の緒方ですがね、アレ以來妙な關係で、イヤ何でもありませんよ、アハ、、、。』

正也は切りに之を胡麻化さうとするが冬子は追窮愈急に。

『その緒方さんが什麼したのでござります。』

(三七) 腹癒の報復 (三)

「什麼も實に困りすまが、實は僕が先年開業するについて、僕は無資産の人間、緒方は御承知の通り、有名な資産家ですから、懇意づからその費用を貸して貰ったのです、商買は比較的繁昌しても、辯護士といふ職業は却々派手で、雑用に追ひ倒されるものですから、却々その償却に手が届かず、二年後の今日まで打ち捨て、置いた所、此頃になつて、アノ結婚拒絶以來、喧しく人を以て督促して來るのです、何しろ友誼で成立した恩借金ですから、督促を受くるまでもなく返さなければならぬいんですが、何しろ素寒貧で、アハ、、、まアそれは可矣とした處で、愈々無名の豪傑が金田先生らしいといふことになる、差し詰め、渡航の費用に事を缺

ぐので、こんなことがなければ、緒方に絶つつもりでしたけれども、それが一寸艱かしいので、アハ、、、何でもない、こんな詰らないことですよ。』
「さうでございましたか、それならば、妾渡航の費用だけは、自分のことでございますから多少の用意は致して居ります、決して御心配下さらないでも宜しうございます、ですけれども、その緒方さんの一件は、そのまゝで宜しいのでございませうか、眞箇に男らしくもない、卑怯な人ですわね。』
「イヤ緒方の事は別に御心配下さらないでも可矣です、多少の成算がありますから。』
「然うでございませうか、渡航の費用は私の方に用意がありますので、決して御心配下さらないやうに、ねね、池田さん。』
「イヤそれなら安心です、兎に角次第に希望に近くなつて行きますから、大に愉快です。』

「妾、眞箇に嬉うございますわ、正也さん、お酌を致しませう。」

「然うですか、什麼も恐縮ですな。」

二人が樂さうに、それからそれへと物語つてゐる、此座敷の外、廊下の襖にピタと身を寄せて、中の話を立ち聞く曲物がある、二人は更にそれに氣が附かなかつた。

曲物は八方に眼を配つて、人や來ると油斷なく警戒してゐる様子であつたが、突如に裏梯子を上つて來る足音が聞けたので、慌て、其處を立ち上つて、自分の部屋に歸ううとした時、出合頭に女中が何か肴の膳を持つて其處に立ち塞がつた而して訝しさうに、その客の狼狽たふりを見上げ見下すので、曲者も薄氣味悪く思つたかぬからの顔で。

「姐さん、僕は先刻から便所を探してゐるんだがね、執方の方へ行くんだい。」
と巧に胡麻化した、女中は變な客だと思つたが、聞かるとまゝに。

「便所はすぐ其處を突き當つた角でございますよ、そんなにお探しなさるほど奥深い所ではございませんわ、オホ、、、。」
捨白を殘して正也の部屋に這入つて行つた、訝しい客はそれを見送つて便所で用を足して、己が部屋へ歸つて行つた。

「眞箇に變なお客様でございますよ。」

女中は正也の部屋に這入つて、何氣なく這んなことを曰つて話ながら食事の給仕をしてゐた。

然し二人は一向それを不注意を聞き流して、自分達の秘密話を立聞かれたとも思はなかつた。

(三八) 腹癒の報復 (四)

『オウ、山田か、大層遅かつたな、什麼だ、首尾は？、何か結果を齎したかな。』

『旦那様、頗る非常な大漁です、大成功でございましたぞ。』

問ふ人はいふまでもない緒方時男、答うるものは緒方の許に四五年召使ふ書生ともつかず、執事ともつかぬ山田勇熊といふ三十四五の男である。

夜はモウ十時頃、飯田町の時男の屋敷の奥まつた時男の部屋であつた、冬子と池田が八百膳を去つたと同じ頃の時刻である。

『アハ、、、貴様がまた誇張して大袈裟な報告をするんだらう。』

『所が旦那様、然うでないのです、悉く事實なんです、まづ仰せに従つて二十騎町の冬子邸の隣に網を張つて待つてゐると、池田の旦那が参りました、ついで二人が肩と肩とをかういふ風に並べて、それはく眞箇に仲よく癢に障るほど、イチヤくして手ぐらゐ握つてゐたかも知れませんが、馬鹿にしてゐるやアがる。』

『オイ、池田！、肝腎の報告を其方脱けにして、そんな真似をせんでも可い。』

『ヘッヘッヘ、ツイその調子に乗りまして……イヤ兎に角怪しからんものです、正しくあの女と池田先生とは關係があるに違ひありません、冬子つて奴が、かういふことを言ひました、正也さん、貴下それは眞箇に水臭いお詞です、將來苦樂を共にする、妾は貴下の未來の妻ではございませぬかつて、甘つたるいことを吐してゐましたせ、什麼も接吻位したらうと思ひますので。』

『フム、山田！、愈それは事實だな、間違ひはないな。』

時男の面は見るく蒼白になつた、山田は眞面目になつて膝を乗り出し。

『一言半句懸値のない所です、そのまゝの口寫しでございませぬ、池田先生も見かけに依らない不徳義な人ですな、旦那様に可い加減なことを曰つて、實は御自分が摘まんでゐらつしやるんで。』

『ウム、愈池田は我輩を愚にしたな、親友の面に泥を塗つたな、覺えてゐろ、屹度仕返しをしてやるから……山田の、兎に角、委しくその道行を報告しろ。』

山田は今宵二十騎町の冬子宅から、二人の後を跟けて八百膳まで行つて、襖の外で始終を立ち聞きした、かの怪しい將校マントの男であつた、彼は緒方時雄の命を受けて、二人の舉動を探るべく後を跟けたのであつた。

で、彼は今二十騎町から八百膳まで後を跟け、それから八百膳で立聞をした一仕一仕を洩らさず、否寧より以上に誇張して、手柄顔に喋々と時雄に物語るのであつた。

かくと聞いた時雄の憤怒は、殆んどその頂點に達した、かれの邪推は今事實にされたのであつた、彼の面には朱が注がれた。

「ウム、すると、冬子と池田の間に約婚があつて、冬子の父の消息も略見當がついたらしいのだな、例の千圓の金についても、我輩が催促したのを、冬子が卑怯な奴だと罵つたのぢやな。」

「罵つた位の程度ではないのです、罵言譏諷、まるで旦那様を畜生のやうに吐し

てみました……。」

「ジ、實に憎むべき奴だ、よし復讐してやる!。」

(三九) 腹癒の報復 (五)

「すると、池田は鐵嶺か何處からか返事があると、冬子と一緒に滿洲へ渡ると曰つたのぢやな、渡航の費用は冬子が有つてゐるんだな、其れでは二人が滿洲へ行かない前に復讐しなければならん、山田!、汝の今夜の行動は成功ぢや、褒美をやる、八百膳の費用は幾何か、つた。」

「イヤ、僅ばかりで……女中の祝儀ども、十圓が缺けますので……。」

「然うか、ぢやア之を遣る……。」

緒方は懐から紙入を出して、十圓紙幣を三枚山田の前に置き、別に一枚を手にし

て。

『三十圓は賞金だ、それから此十圓は八百膳の費用だぞ。』

『什麼も、這んなに頂戴しましては甚だ恐縮で……。』

『貰つた時ばかり莞爾々々はせんで、まだ之から大に働いて貰はんければならんから確乎道つてくれ。』

『宜しうございますとも、旦那様の吩咐でございましたら水火も辭しません。』

『嘘を吐け、そんなお世辭を曰ふな、それよりか、例の池田の二千圓の口だ、彼の利子は幾何になつてゐる。』

『左様でございます、百圓で一圓、二千圓で一ヶ月二十圓といふ率になつてゐますので、百圓づゝ二度入れましたから、丁度二百八十圓位でございます。』

『然うか、期限は十ヶ月だつたね、公證してあるんだな、すぐ執行が出来るんだらうな。』

『エ、ね、そりやアもう執行は何時でも出来、昨日も命令に従つて、嚴重に催促して置ました。』

『モウ催促せんでもよろしい、明日それ〴〵の手續をして、至急に差押さへをしる俺の名で具合が悪ければ、汝に債權を譲り渡した體にしても可矣から……。』

『イヤ旦那様、そんな事をしては損でございます、何んと云つたつて相手は辯護士です、差押は出来ても、何れ異議の申立もしませうし、本訴になつてから却々費用倒れで大變です。』

『イヤ構はん、意地でやるのだ、金は取れなくともよし、費用は幾何かゝつて可い相手が辯護士でも、權利の執行に二つの道理はない、成るだけ大袈裟に、人の目につくやうにやれ、小心な池田だから、自己の面目上狼狽するに違ひない、今更泣きを入れられもしまし、殊に依つたら冬子に泣き附くだらう、冬子が一時その旅費に充てゝゐるといふ金を融通するかも知れん、それで返すにした處で、一時冬子は

満洲に行くのを見合せなければならんことになるから、何れにしても報復は出来る道理ぢやアないか。

「ナ、成程、然ういふ目的の許におやりになるんでしたら、甚ば結構でございます目的は充分に遂げられます。」

「池田が今他からオインレと、二千圓の耳を揃へて融通のつくのなことは我輩が、彼奴の懐をよく知つてゐるから判り切つてゐるのだ。必らず面喰うに相違ないそれでまだ復讐の目的が達せられなかつたら、他にも方法はあつたよ、アツハツハツハ、泣き面を見てやらうか。」

時男は溜飲を下げたやうに笑つた、さりとては卑しい心の男である。

(四〇) 思はぬ難義 (一)

「では緒方が差押ねをしたのでございますか、まア、何といふ卑怯な男でございませう、眞箇に腹が立ちますわね、それで池田さん、貴下、什麼遊ばすおつもり。」
「什麼と曰つて、實は差し當つて二千圓を調達する見込はないのです、元來が友誼上から出た貸借なので、這麼結果を見るに致つたのは如何にも残念です、緒方だつて、初めから這んなことをするつもりは無つたのでせうが、例の一件を何か誤解して故意にやつた事だと僕は思ひます、本來から此際耳を揃へてお禮を曰つて返したいのですが、何しろ素寒貧の上に、まだ辯護士としての信用も薄いし、まあ止むを得ませんから、先方が友誼を破つて出た以上、異議の申し立てをして、本訴に及ぶまでのことと覺悟してゐるんです、けれども困ることは、單に差押ねをしたばかりでなく、誰が流布するのですか、切りに僕の信用を損うやうな中傷説を、裁判所まで行つて試みるので、さも僕が緒方に對して不徳義でもしたやうで、それが實に心苦いのです。」

正也は、冬子が事情の根問ひ葉問ひするのに對して、事もなげにかう答へたが、掩ふべからざる苦痛の色はその眉宇の間に現れてゐた、冬子は凝と考へてゐる様子であつたが、思ひ切つたやうに、つと膝を押し進めて。

『正也さん、妾這んな差出口を申しては甚だ相濟まないことでございますけれど、兎に角之は今の貴下の立場から申しましても、また信用から申しましても、そのお金を緒方に叩き附けて、後の苦情を除いて了はなければなりませんと思ふのよ、それにはアノ妾、確千圓位、父が甚兵衛に残してくれて行きました遺産がございまして、父の消息が判つて、滿洲へでも行く時には、それを、旅費にしてと思つて居ましたが、焦眉の急には代へられませんか、それをお使ひなすつて頂きたいので、それにしましてもまだ千圓ばかり不足しますが、それはまた及ばずながら工夫も致して見るつもりでございます……』

『ト、飛んでもない、僕一箇人の負債の爲に、金田先生の残して行かれた謂はゞ遺

産を……まアそれは可矣として、翌日にも先生の消息が判つて、滿洲へ往くといふやうな場合になつて、その金を假令一時でも融通して了つたら、貴女は何してお父様の許へ往きますか、僕は男子としてそんな不義は出来ません。』

『オホ、お金といふものは、本來蓄へて藏つて置くものぢやあなかつてよ、有用な時に用立て、こそ、初めてお金の効能があるんでございませう、今はその有用な時に迫つてゐるのでございませう、成程明日にも父の消息が判つたとしても、貴下が今此始末で爲らつしやるものを、そのまゝに見捨て、妾一人で往けるものでもございませんし、之を此ま、捨て、置いて貴下に往つて下さい、とは尙更申されません、それほご、妾、利己主義ではございませんわ、それに第一今の貴下と妾とは、利害の關係が同じなのでございませぬ、父の消息を聞いた時の用意をしようと思ふなら、貴下に後顧の憂ひのないやうにして置いて頂かなければなりません、而うしたら、有るお金を有用に使うことは、何でもないぢやアございませんか。』

冬子は理を説いて自分の財を一時の急に充てやうとしてゐる。

(四一) 思はぬ難義 (二)

冬子は、緒方の卑劣な心を悪むことが甚だしいだけ、また緒方と池田とが這んな仲になつたのも、原を糺せば自分故だと思ふにつけ、意地からでも池田を立派な男にして、緒方に鼻を明かしてやらなければ、自分が立たないやうな氣がする、冬子は此問題に對して、根が利かぬ氣の女だけに、躍起となつてゐるのであつた。道理を説いて正也に得心させ、現在所持の千圓を基本にさせやうとするけれども、正也は金田先生に對する徳義として、什麼しても承知しない、而してよし千圓の金があつたにした所で、残る千圓の金の調達が出来ねば、何にもならぬと曰ふのを口實にして應じない。

冬子は緒方に對する意地を説き、正也自身の社會に對する信用を説き、また裁判所の威信問題などを説いて説得しやうとするけれども、正也は義理を重んじて、頑として應じなかつた、冬子は少し考へ直して話頭を轉じ。

『池田さんそれでは、妾が千圓のお金をすぐ緒方の處へ持つて往けるやうに、二千何百圓にして來たら、受取つて下さいませるか、千圓が半端で用をなさないとすれば妾にも少し成算がございますから、屹度二千餘圓に纏めて参ります。』

何と思つたのか、冬子は斯う言ひのこして正也の許を辭した、正也がこれを追ふた時には冬子は早くも戸外に出てゐた。

冬子は何れにしても今の場合、正也の危急を救ふて、卑しい緒方の鼻を明かすのには、自分の手のその金を調べて、場合に依つては池田にそのことを告げずに、自ら緒方の許へ返しに行つても可矣といふやうな決心を定めたらしく、其にしても金の耳を揃へることが必要だと思つて、一旦二十騎町の我家に歸つた、歸るとすぐに

甚兵衛を呼んで、突如に貯金の額を聞いた。

『老父さん、妾の今の財産は、殊らずで若干あるのでございます、少し必要がありますので、お聞かせなすつて下さいまし』

其兵衛は冬子が簀から捧の質問に、呆れた顔でその面を打ち成り。

『何んだ、突如に吃驚するぢやねわか、金か、財産と曰つてもお金だけだ、先生が家出する時に置いて行かつしやつたお金と、それに阿蘇の家を叩き賣つて金にしたのと、それだけだよ。さあ幾千あるかな、二千圓ばかりはあつたが、今ぢやア千五百位になつてゐるだらうと思ふだ。』

『エーッ、千五百圓老父さん、眞箇に千五百圓と、屹度ですわね。』

冬子は急ぎ込んで駄目を押した、老父は怪訝な顔で、冬子を見上見下し。

『千五百圓が缺けてゐる氣遣ひはねわ、まア六百そこくは確かアよ、それを聞いて、汝、什麼するだア。』

冬子は老父の間に答へやうとせせず、何か切りに指を折つて考へつゝ、

『然うだ、千五百圓としても、思つたよりは五百圓多かつたね、然うするともう利息とも六七百圓あれば、正也さんが今蒙つてゐる耻辱が雪げるのだ緒方の侮辱を勿反してやる事が出来るのだ……』

と、勝手に何か思案して、老父が不審に思ひつゝ、根問ひ葉問ひするのを宜い加減に扱つて、また他出したのであつた、冬子は一體什麼しやうといふのであらう。

(四二) 思はぬ難義 (三)

それ以來冬子は、三四日の間殆んど家を外にして、八方を駆廻つてゐたらしいが五日目の午後、何處で什麼工面して來たのか、五百圓ばかりの金を懐にしいそくとして我家に歸つた。

甚兵衛は、冬子が雷ならぬ昨今の様子といひ、金の詮議をする模様など尋常事でないもので、よく其腹を聞いて見やうとは思つてゐるが、少しも落ついて自宅にゐないので、しみりと聞く遠がなかつた、今日は少し自分の部屋に腰を落着けたらしいので、什麼いふ理由か糺さうとツカ／＼冬子の部屋へ這入つて行つた。

冬子は老爺の顔を見るなり、何か思案してゐたらしい面を擧げて、莞爾々々しながら。

『まア老父さん、妾、今貴下の處へ御願ひに行かうと思つてゐた處なのでございましてわ。』

『ウム、然うか、俺も汝に聞きたいことがあつてな……少時も自宅に落着いてゐねわだからなア……。』

甚兵衛は火鉢の前に腰を落として、汚れた腰提の煙草入から「はぎ」を煙管に詰めて、スバ／＼と煙らし初めた。

『お冬よ、汝、此二三日何だか一人でそは／＼してゐるがのう……。』

老父がそろ／＼口を切るのを、冬子は慌て、それを制して。

『老父さん、貴下のお聞きなされることは妾よく判つてゐます、決して御心配なさることはありません、それよりも、妾がそは／＼して自宅に落着かないのは、お金が入用なのです、老父さん、此間お話をすつたアノ千五百圓の通帳、彼れを今すぐお出しなすつて下さいな……。』

冬子は今自分の金にして、然も自分の自由にならぬ千五百金を、什麼して甚兵衛の手から出させやうと、其方法を考へてゐた所であつたのだ、其處へ折よく甚兵衛が来てくれたのだ、機先を制して突如斯ういつた、甚兵衛は眼を皿のやうにして、冬子の面を覗め。

『何んだ、お金出せ、ウム、そりやア汝の金だから、場合に依つたら出さねわこともねあが、アノお金は先生の消息が判るまでは使うことは出来ねわお金だアぞ。』

「ソ、それは妾だつて承知してゐますのよ、此間も度々話しをする通り、池田さんや加藤大佐のお骨折で、お父様の消息も九分通までは判つたのです、それについて是非二千二百圓のお金お入用しますので、妾、自分で今五百圓だけ拵へて來ましたから、老父さん、アノお金残らず出して下さいまし。」

「ウム、ぢやア旦那様のお消息が確と判つたのか、而してそれは什んな消息だ、やつぱり満洲にゐらつしやつたのか。」

「エーソ、ソノ、やつぱり満洲でございました、何れ委しいことは後で悠乎お話致しますから、早くお金を、ねね老父さん、早くお金を……。」

冬子は、事情を明して甚兵衛に物語ることは知つてゐるが、一微顔固の彼が、一通りのことでは應じまいと思つたので、腹の中では甚兵衛にその罪を詫つゝ、他くまも父の消息に托して、彼を欺きその金を引き出さうとしたのであつた。」

(四三) 思はぬ難義 (四)

冬子は此忠實にして純朴な、複雑してゐる社會相か知らない正直の老父を、例へ一時の窮策にもせよ、欺くことの罪悪であるのはよく知つてゐる、けれども、今咄嗟の場合、萬全の策を取るには、飽迄之れを欺き了せなければならぬと、必を鬼にして終に之れを説得し、千五百圓餘の金を引出させた、それに自分が工面して來た五百圓を加へてもまだ百餘圓ほど不足してゐる、冬子は大膽にも再び甚兵衛を騙つて、自分の衣類目星しいもの十餘點を金に代へて、漸く二千二百餘圓の金を調達し得た。

冬子はそれを携へて、其日の午後我が家を出た、指して行く所は無論京橋七官町の池田正也方である。

「什麼致しまして、金を持つて来るんでしたら、アノ女がやつて来る譯はございません、女を代人にする譯がございません、屹度色仕掛で、二人相談の上、泣きを入りに来たのでございませう、美人局く、旦那様如何致しませう。」

「ウム、さうだな、いくら池田が愚でも、金を拂うのに女を代人に寄越す譯はなしやつぱり泣きを入りに来たらしいなア、なア山田！」

「さうでございませう、それに違ひありません、旦那様鼻毛を讀まれちあ可ませんせ。」

「餘計なことをいふな、應接へ通して置け。」

(四四) 思はぬ難義 (五)

冬子は八疊の客室に通されて二十分ほど待つてゐた、やがて時男は大島の綿入羽

織に同じ綿入といふ姿で、此間とは打つて變つた大眞面目な顔をして這入つて来る。

「大層お待たせ致しました、何か池田の事で御用ださうで、多忙な身ですから、手つ取り早く御話を伺ひませう。」

餘事は一言も曰はず、亦結婚を申込んで拒絶されたことなぞ腰にも出さない、冬子は腹の中で可笑しくもあり、苦々しくもあり、小面憎くもあるが、態ど丁寧に時候の挨拶なぞして。

「先日はいろく御親切に仰せ下すつたことを、無碍にお断り致しまして、眞箇に何んとも申譯がございませぬ……。」

皮肉に一矢浴びせて、様子如何にと時男の面を見たが、時男は一向平氣の體で、眞面目な顔をいよく難しくする、而してもごかしさうに。

「イヤ、そんな事は何とも思つて居りません、池田についての御用談と仰有ると什

「麼ことで、何か仲裁のやうな意味でお在になつたんですか、短刀直入、早く願ひた
 いもので……。」

一五五

緒方は初めから額を括つて、擲擲してやらうと、輕卒にも不謹慎な詞を出した、
 それが冬子のすべて思ふ壺である、彼は冷やかな笑を浮かべて。

『什麼致しまして、池田さんは堂々たる男兒、女風情を以て仲裁や示談に寄越すや
 うな、卑怯な眞似はなさらなくつてよ、妾、今日池田さんの代理で、借入金
 の精算に参りました、此席で只今すぐに御取引を致しますから……。』

冬子の詞は、緒方に取つて實に意外千萬であつた、彼は豫期に反して、不意を打
 たれたものか。

『エーッ、二千圓の元利を精算すると仰有るんですか、アハ、、、冬子さん、眞
 筒ですか。』

『失禮でございませう、眞筒とは何事でございます、貴下方の心事を以て見たら、

そんな考も起るのでございませうね、猿は猿だけの智恵です……。』

『ナニ、猿？、怪しからんことをいふ、宜しい、金を受取ませう、元利共に二千二
 百四十圓、チャンと揃つてゐませうなア。』

『御念には及びません、借用證書をお出し下さい。』

冬子がかう言つて、悠々と懐から縮緬の帛紗に包んだ百圓、十圓各種の紙幣の束
 を數へて、時男の前に積み重ねた、時男は寧ろ氣を飲まれた形で、呆氣に取られて
 それを見てゐる。

『二千二百四十圓、數をお検め下さい、證書と引換へにお渡し致します。』

時男はあまりに意外なのに面喰らつて、額には手も出しかね、山田を呼んで證書
 を取り出させ、紙幣の數を調べて、それを返した。

『オホ、、、かうしましたらモウ異議はございませんわね、緒方さんは眞筒に男
 らしいお方よ、お金か何かでなければ、復讐は兎ても出来ませんわね。』

『ナニ、何んですと……。』

緒方が氣色ばむのを、傍にゐた山田が引き止めて口を挟み。

『此金は池田さんから、直接に受取るべき性質のものでございませう。』

と、曰つた、冬子はそれを流石に見て、

『お返し申すお金を、誰がもつて來つたて可矣ぢやあございませんか、貴下の方は返して貰へば、それで可矣のでございませう。』

冬子は這んな捨白を殘して、サツサと緒方邸を切り上げた。

(四五) 三筋の糸 (一)

二千余圓の大金を、女一人の腕に兎も角も調へて、緒方の許に返して來た冬子はヤツと肩の重荷を下したやうに、ホツと息を吐いて池田の許には寄らず、そのまゝ

踵を返して我家に辿り着いた。

甚兵衛が煩さく付き纏うて、いろ／＼の事を根問ひ葉問ひするのを、宜い加減に挨拶らひ、その夜床に就いてから 何かは知らぬが、長い／＼手紙を書いて、その中にかの二千圓の古證文を巻き込み、嚴重に封をして全く睡に就いたのは午前三時頃であつた。

翌くる朝は、思はず寝過ごして眼が覺めたのは九時頃であつて、食事が済むと甚兵衛を呼んで。

『老父さん、誠に濟みませんが、今から此の手紙を持って池田さんの所まで行つて頂きたいんですが……。』

斯う云つて前夜認めて置いたかの長い長い手紙を其處に置いた。

『ア、可矣ともく、行つては來るがな、然し汝、前日話をした先生のごことは什麼なつたんでね、俺アそれが氣が／＼で／＼なんねねだ。』

『そのことも、之を池田さんの處へ持つて行つて下さると、池田さんが委しく話を
して下さいますよ。』

一五八

『ちやア之を持つて行つたら判るのかい、そんなら一走り往つて來べよ。』

甚兵衛は訝しうに、何んもなく心にかゝるやうに、冬子の面を右顧左盼して幾
度か小首を傾げつゝ、後に心を残して出て行つた。

甚兵衛は二三度池田の許に行つたことがあるので、電車の勝手だけは知つてゐる
八官町の池田の事務所へ行くと、正也は裁判所へ往つて留守だといふ、二三時間待
つてゐると、午後の二時頃に歸つて來た。

『アツ、老爺さんですか、上り給へ、いろ／＼話もあるから……。』

正也はかう曰つて、無理に甚兵衛を己が書齋に伴ひ入れた、甚兵衛は窮屈相にし
て、隅の方に畏まる、而して懷から冬子の手紙を出して、正也の前に置き。

『娘が之を汝さんに渡してくれて、その使に來たッア、而して先生の消息も汝さ

んに會つたら判るつてな……。』

正也は不思議さうにして、その手紙を手に取り、表と裏とを返して見て。

『ウム僕に會つたら、金田先生の消息が判るつて、ハテナ……。』

かう云つて、かの手紙の封を押切り、スラ／＼と讀んで居つたが、まだ半にも達
しない中に、正也の手は慄へ、顔色は蒼白になり、ハツ／＼と大きな息を吐いて、
時々感情を制し得ぬやうに、眼を瞬いては讀んで行く、その様子の尋常事でないの
に甚兵衛も吃驚して、及腰に手紙を覗き込み、手紙と正也の顔を等分に見較べつゝ、
氣遣はしげに坐つてゐた。

正也はやがて手紙を讀み終つて、その終末を披くと、バラ／＼と例の二千圓の証
文が四つに折られたまゝ、其處に落ち散つた、慌て、それを披ろげて見た正也は投
げるやうに身を机上に杖ついて。

『大變なことをしてくれた、冬子さんは、オ、老父さん、今何をしてゐました。』

息を喘ませて聞く。

和田天華氏著述目録

静し	子全三冊	涙な	ま	く	ら	全三冊
二人の女	全三冊	機き	性せい	全三冊		
罪ならぬ罪	全二冊	弱よ	人ひと	全三冊		
戀の意氣地	全二冊	實あ	の	全三冊		
おとし	全二冊	の	か	全三冊		

右いづれも樋口隆文館より出版いたし居候

おとし兒 (終)

大正四年六月七日印刷
大正四年六月十二日發行

(定價金四十五錢)

樋口隆文館 營業案内

樋口隆文館は主として小説の出版に及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君に及ばし本を營業とせられ諸君は多少に拘らず御注文被下度候

御賣目録御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新版發行致べく候

樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

有所權著作

見しとお

著者 和田天華

發行者 樋口源次郎

印刷者 河上貞次郎

大坂市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷

大坂市四區新町北邊一丁目五十番地

發賣元 樋口隆文館 (振替口座大阪八七九七)

江見水蔭君作
八幡白帆君畫

中央新聞 掲載小説 三怪人

各册共木版
極彩色密書挿入
全四册各一册
實價金四十五錢宛
送料四册二付八錢
但シ内地限り

怪賊の一團あり、其行動の奇幻妙怪なる、實に神没鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻悪辣を極め、近時有名なりしチゴマ、ボンノ一の徒輩をして、遠く三舎を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戦慄すべき悪争苦闘を経たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を剝り肉を刻む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつてす、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお奨めをする。

渡邊默禪君作

口繪 歌川國松君
執筆 谷洗馬君
者 鈴木錦泉君
川上恒茂君
長谷川小信君
艶麗極彩色
口繪挿入美本

日本新聞 掲載小説 千里眼 横山花子

全三册二付
實價一圓四十錢
(送料共にて)
全二册二付
實價金一圓
(送料共にて)

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲惨骨を剝り肉を刻むの消息がある、彼女の父は東京府の参事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歳、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となり、了して天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の徑路を寫す間に、靈と肉との戦ひ、個人と社會の葛藤の如何に險峻烈なるかを説きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其内容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誕らざるを知られよ。

新田 静 濤 君 作
谷 洗 馬 君 畫

立志 富の力
ちから

各册共木版
極彩色口繪挿入
全三册
實價各一册四十五錢宛
送料三册二付八錢

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立て、故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮闘努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。

大阪新報記者
行友 李 風 君 作
山本 英 春 君 畫

龜 甲 組

(木版極彩色頗美本)
全三册
實價各一册金五十錢
送料一册二付六錢
三册二付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騒がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀罪
小説

全二册
美術木版口繪挿入
各一册實價五拾錢宛
送料二册二付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とたへられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世

にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か陰れたる大なる秘密が無け

ねばならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に

同情の涙を澀かしむる悲痛凄惨なる、且美しき物語があるのだ。

樋口隆文館新刊小説

渡邊歌露氏作	千枝子	上	各一册	四十五錢
○俠妓小鶴	上	各一册	四十五錢	
○風流菩薩	上下	各一册	五十五錢	
○横山花子	上下	各一册	五十五錢	
和田天華氏作	浪まくら	上中下	各一册	四十五錢
○靜子	上中下	各一册	四十五錢	
○戀の意氣地	上下	各一册	四十五錢	
○罪ならぬ罪人	上下	各一册	四十五錢	
○弱き罪人	上中下	各一册	四十五錢	
新田靜海氏作	○愛と財力	上中下	各一册	四十五錢
○富の財力	上中下	各一册	四十五錢	
鹿島櫻卷氏作	○海の豪傑	上中下	各一册	四十五錢
○戀の敗者	上下	各一册	四十五錢	

217
109

終

